明治三十一年八月十日

女學雜誌

第四百六十九號

第四百六十九號目次

◎口繪
　[illegible]（ト[illegible]ツァ氏）

◎小說
　[illegible]

◎家庭
　[illegible]

◎論叢
　[illegible]

◎文苑
　[illegible]

◎雜錄
　[illegible]

◎時文
　[illegible]

片々◎時報

社告

[illegible]

● 女學雜誌定價表 ●

[illegible]

[illegible]

社告

櫻井成明君譯
腓立比物語
定價二十八錢　郵稅六錢

橫山雅男君著
婚姻論
定價十二錢　郵稅四錢

若松賤子君譯
小公子
定價三十五錢　郵稅八錢

前號四百六十八號七月二十五日發行要目

政客の所謂る第二維新[illegible]　[illegible]文部大臣　[illegible]

故若松賤子君遺文集
巖本嘉志子
定價六十錢　郵稅六錢

小川靜岡・故小此木秀野君合著
俳諧史傳
定價二十七錢　郵稅四錢

故鈴木弘恭君述
百人一首講義
定價二十八錢　郵稅四錢

同
文法口授
定價十二錢　郵稅二錢

岡山孤兒院贊助員募集

一、本院の目的を贊成し毎月金拾錢宛寄附する人を贊助員と稱す

一、寄附金は毎月本部或は支部より事務員を巡廻せしめ領收可致候

一、贊助員には毎月發行の岡山孤兒院新報を進呈し院況を報告す

一、贊助員たらんと欲する方は左の申込書に住所姓名御記入の上御差出被下度候

明治三十一年五月

岡山市門田屋敷

岡山孤兒院

岡山孤兒院概則

第一 位置

本院は本部を岡山市門田屋敷に、支部を日向國兒湯郡に置く

第二 主義

基督教即ち敬天愛人の道を實行するを以て本院の主義とす

第三 目的

天下無告の孤兒或は事情之れに均しき貧困の兒童を救濟し其父母に代りて之れを教育するを以て目的とす

第四 入院及退院

六歳以上十二歳以下の者を入院せしめ、十六歳乃至廿歳にして退院せしむ

第五 普通教育

岡山孤兒院尋常高等小學校に於て普通教育を施し、學事拔群のものは尚ほ進んで他の高等學校に入學せしむ

第六 實業教育

年齢十二歳に至れは學業の余暇院内の實業部に於て勞働に從事せしめ、卒業の後は院内の各實業部に於て或は他の農工商家に依頼して一の職業を修めしむ

第七 維持法

内外國有志者の臨時寄附金品と、贊助員の寄附金と(一ヶ月金拾錢宛寄附する人を贊助員と稱す)實業部の收入金とを以て之れを維持す

第八 報告

毎月一回岡山孤兒院新報を發行して院况を報告し每年二回(一月、七月)會計の決算報告をなす

概況

(設立)明治二十年九月◎(經過)滿十年十ヶ月◎(入院兒)四百五十名◎(現在兒)二百六十名◎(役員)三十名(事務員五名、學校教師六名、實業部員七名、世話人十二名)◎(年齢)幼兒四歳最年長兒二十三歳◎(經費)一人につき一ヶ月金三圓程全躰の費用凡一千圓◎(敷地)三千余坪◎(建物)岡山にあるもの十三棟日向支部にあるもの九棟◎(學校)岡山孤兒院尋常高等小學校及び夜學校あり◎(實業)岡山孤兒院活版部、日州活版部、理髪部、農業部、精米部、機織部





女學雜誌

第四百六拾九號

明治三十一年八月十四日發兌

社說

蓄妾打擊

不心得のものは所詮絶ゆるとなし。絶えざれども、棄て置く時はいよ／＼増加する故に、痛酷の打擊を加ふるとを容赦せず、機に應じ、折に際して、尤とも嚴密の制裁を施こさずんばある可らざる也。世には、善人一分、惡人一分なり、中間八分の多數者は只だ風に隨がつて化するものなれば、世上の流行の善惡にて、其の何れにか趨らんとす。衆生濟度の方便に、天下の大勢を善導するを慈悲とするは此の故也。

蓄妾の弊今日の如く甚しきは稀れなり。萬朝報近來日々其の實例を揭載し、續々盡きず。然れども、吾人は寧ろ名士にして置妾せざるものの名を列擧する方、遙に簡易ならんとを信ず。何んとなれば、其十中八九は皆な、妾又は準妾の類を畜ふる痴れ者なれば也。

彼等の多數が皆な情慾に驅られて之を畜はふるとは思はれず彼等は寧しろ一種の流行に驅られて、無理算段の末に之を置くものと見ゆ。彼等は今ま妾宅の有無をもて其の富の符徵となさんとする也。彼等の見榮坊なる、其の富の看版を大きくせんとするの慾心によつて妾宅を置く。色慾の餓鬼たるとも免かれざれども、亦た拜金の奴たるとも免かれず。其の甚しき内に才覺して、借金をもて妾宅を維持せんとする志望は、大抵財慾の故に發すると多し。眞に憫然を極めたると也。

斯く計り難症となりたる病弊を如何にして救はん乎。萬朝報の爲す所も、一種の矯正策たるには相違なしと雖ども、彼處に揭載せられたるものの多くは恬然として恥ぢず、寧ろ交友の間だに談笑して、一種の話柄となし、其の暴かるるの遲速をもて互ひにからかふに過ぎず、毫も制裁なき實相を見るべし。中には、其の同類の多きをもて誇りとし、誰も彼も其

仲間と心得居るあり、言語道斷の事と云ふべし。

夫れ、畜妾の弊たる因習あり、直ちに絶對に其の惡徳たることを識認せしむるは容易ならずとも、追々に其の弊風より遠ざからしむるは難事にあらず。明治の初年、妾は二等親として歴々公認せられたるに係らず、其後遂に之を削除し、現在は之を公認せざることとなりたるなど、中ごろ世上の矯風論大いに與かりて力ありたる故なり。惟ふに、志士今より蹶起し、更に其の攻撃を逞ふすることなくば、此の滔々たる風波瀾を沈靜するとも難にあらじ。何んとなれば、もと〳〵意氣地なき男子輩が一種の流行として盛んにしたる結果に外ならざれは也。

蓋し、今にして畜妾の弊を除くは既に晩し、其の畜妾より結果する家庭の波瀾、不義理、陰樣の秘密等を容赦なく暴露し、彼輩男子をして復た顏色なからしむるなど、一種の激烈たるべし。吾人は其事項を両報の實際に待たんとす。尤も悛るめまじきは、公娼廢止の大運動なり、金錢を以て女郎を買ふの不自由を痛感するときは、其の反動意外の邊に迄で波及すると從來屢々として實驗あり。かの外山正一氏が降んに廢妾論を主張し、もしくは一時大に蓄妾の流行を止めたる如きは、世上に公娼廢止論の勃興したる時にてありき。吾人は此の多年の志士に要めて、其の新鮮なる盡力の更めて奮起せんことを待つ。

一應は氣の毒なることなれども、妾腹の子即はち庶子を輕蔑し小學校にても、庶子と知れ渡りたるほどのものは、子供の仲間にても通りの惡るきものとならしたし。之れ誠に無邪氣なる本人に取りて憫れむべきことなれども、更に多數の憫れむべきものを出さゞらしめんが爲めには、遂に此の惡手段を辭すること能はず。

凡そ此般の改革事業に、青年の力を假らずして成功することなし。青年諸君何人ぞ、彼の妾宅に向つて痛擊を加へざる。紳士紳商など門戸に構へ乍ら、家に貞節の妻が家政に苦悶する状態をも忘却し、常々手車に乘り、卷煙草など、くゆらせて妾宅に通ふと云ふ、不埒千萬の事にあらずや。彼等は清潔なる人情を辨まへ得ざる動物なり。紳士紳商として待遇すべき價値あるものにあらず。夫れ相應の取扱かひにて十分也。

嗚呼、大臣、妾を置く、出入の商人、其妾の手づるをたぐり

て、又妾を置く。社長既に斯の如し、支配人も亦た其の手づるをたどる。支配人既に斯の如し、新参ものすら尚ほ此の徑に依らんとして、無理に妾を置く。嗚呼、初め獣の如き慾に驅られて置妾の罪悪を犯すものは、純粋に悪むべし。之に取入らんとし、夫に便らんとして、妾を置くものなどに至ては不憫至極の事にあらずや。世上の流行、此の方に赴けば、軟骨男子皆な此に走る。彼等の軟骨をあはれめ。彼等は痛棒を加へざれば自から制しがたし。彼等は慟哭して世の流行より先づ改ためくれよと哀叫す。彼等は食はんが爲めに斯る不始末にも陥いるとぞ。食はせよ、飲ませよ、其生計の爲に同情を表せよ。而して斷乎として其の泥濘中に落入りつつあるを防がざる可らず。是れ瞭然たる志士の義務也。

竹閣避暑

柴門鮮人客。炎熱頼相忘。愛彼林間靜。復茲池上涼。
託心時談笑。迎客或推觴。况有陶家趣。歸飲醉夕陽。

家庭

暑中自から涼風あり

◎互ひに挨拶してあつし〳〵と言ふ時は一種の涼氣あり、心に懐しむ所あればなり。自から惰氣を生じてあつし〳〵と言ふ時は、反つて暑氣を増す。あつさは心外より來るもの少なく、身内より催ふすもの多し。

◎十里の道を行くものは、午前に九里を了るべし。夏の日の課業は、拂曉三四時より朝餐に至る迄に七八分を了し、夕涼少しく催ふす時、二分を了すべし。心中閑なれば涼氣あり、一身徒らに閑なれば、暑を増す。如かず相應の課程を置かんには。

◎拂曉曙光少しく兆さし、日輪未だ地平線より破れざる時、草木の色の如何に若きかを見よ。草頭の露珠の如く、其葉、瑠璃の如く、樹木の新らしき芽葉皆な寶珠となる。此等清新の光景は、曉に忠にして早く臥床より突出するものにあらざれ

は示さず。此際の清涼何ものにか比べん。

○悴容は汗を發す。氣一と度びゆるめば、肺熱自から騒ぐ。無爲にして清閑なるは君子の涼を取る所、無事にして雜念あるは衆人の暑さに苦しむ所。

○炎々として小厭しき酷暑は一種の快を生ず。夏の暑きは、其の尤とも酷なるを可とす。而して涼風あり徐ろに來る。團扇を執りつつ此の涼風に應接するの快味は、只だ爽然たるものの專有する所なり。

○秋凉は冷氣を驅ぞく。料理は冷氣を追ふ。夏の富家は特に尤とも驚はんとを要す。床前階段、檐下清白なれば、涼風其の肌より吹起る。

○午睡必らずしも不可とせず、只だ時の長きを不可とす。其の時尤とも酷熱の時に於てせず、少こしく其の減ずるの時に於てし、僅かに三四十分乃至一時間に限れば、快起爽然として精氣の一新するを覺ゆ。

○夏の日台の午睡は、當年の幼兒をして長く肥膝のゆかしきに忍ばしむ。一家皆な睡り、蟬の聲ひとり後庭に喧しき時、幼兒の世界はありき。今にして炎熱の際、蝸屋に之を忍べばたゞ酷暑の燃ゆるが如きを樂しむ。

四

○樹陰よし。清流よし。高樓の海に臨むものよし。獨家の谷に枕するものよし。大廣間の明け離されたるよし。夏休中の校舍よし。然れども、必らずしも之を避暑に切要なりとする勿れ。もし之なき時に如何せんとする。

○肌ぬぎも倘ほ面白からず、况してや裸体をや。人は今ま一枚脫がばさこそ涼しかるべきにと思ふ所に忍ぶを可とす。靴すべて極に達して倘ほ足らざる時如何にせんや。

○扇子、團扇は必らずしも用ゐんとを欲する勿れ、風の權現として之を見よ。若し只だ騒がしく之を用ゐんとせば、氣息反つて動かん。たとへば、火を燃やして之をあふぐに似たらずや。

○知友、簡短にして清楚の音信を通ず、既、幾何にも、清よきを爲す。此際、此等の清韻に對すれば、彼我何れも涼し。

○彼の熱水の中に役して、熱日の下に、田草取る乙女等を見れば、誰か背面に涼風を感ぜざる。

○誰か夏を苦しと言ふ。早朝、暮夜の涼風は、夏の熱きにあらざれば、人よく之を受るに堪へざるに非ずや。

妻を擇ぶ東洋西洋相違ふ乎

近頃長逝して去つて復た歸らざるビスマーク、グラッドストーンの如き俊傑には夫々著名の賢夫人ありて内助の功を爲せり此は何人にも知れ渡りたる美談の一つにして男女伉儷の理想として毎度引用さるるほどなれば凡そ文明人士の妻たらん程のものは只だ愛嬌ありて其人の氣に入ると云ふ丈けにては不足なり必らずや學力あり伎倆あり見識ありて其人の事業を助け其成効の半ばに當る丈けの價値なかる可らずと云ふ事西洋方今の輿論となれり女學校教育の方針は固より家庭幼女を訓ずるの感化に至る迄で一切此の目的に應ぜざるは無し即はち西洋風婦女子の一と見識ある所以にして此の一と見識は是非とも其の婦德に欠く可らざるものとなれり一層切に言へば必らずや其資格に無る可らざるものにて申さば嫁入道具の一つとなれり西洋に在ては之れ其の婦女子が男子の渴望を吸引する愛嬌の一つとなれるものと云ふべき歟。

然るに東洋風の男子に一種奇異なる渴望ありて云ふは其の男らしく豪傑らしき程いよ〳〵以て婦女子の可憐なるを愛し楚々優柔むしろ衣に耐へぬほどに弱々しきには情を寄すれど獨立毅然何の助けも入り用ならぬかの如く見ゆる婦女子には寧ろ心を寄せざるの一事これ也斯る婦女子の敬すべく重んずべきを知りて之を朋友とすることを好むとは雖ども之を内君とすることを好まずと云ふは斯る種類の男子が眞實に自狀する所なり西洋風の學文したる女學生などは此の事を聞きて大きに憤ほり乃はち是れ東洋男子が女を玩弄するの餘習なり婦女子を憫れむことを知りて敬することを知らず妻を同等に置くことを許さずして其の慰さみにせんとすればこそ斯る不條理の趣味もあることとなれと不平止まざる所なれども抑そも西洋の男子の渴望は文明流にして東洋男子の趣味は野蠻なりと一概に言ひ去りがたき所以あり若し男子の心得の宜しからぬを責めんとせば東洋西洋同樣なりと知らざる可らず何んとなれば西洋男子が學力ある婦女子を求むると日本男子が可憐なる婦女子を求むるとは其外面相異なりて内情は相似たればなり彼等は必竟世の風習と一般の好みとに隨つて其趣味を變ふるに外ならず無論其好に優劣はなきと也。

そを何如なる譯ぞと問ふに西洋には男女混合の交際盛んにて

男女間の談話切りに行はるるゆゑ女に學問と伎倆とを要すると日本の比にあらず若し相當の學力なければ人中に出でて口も開けず交際の伎倆なければ何時も人後に瞠若たる計りなれば是非とも此等の心掛はなかる可らず即はち此等の心掛あるが人中に出でての第一の愛嬌にて男子の目を引く宏大の引力なれば西洋男子が學力あり見識ある婦女子を渇望すればとて必らずしも高尙の意味ある故とのみ思ふ可らず畢竟其の社會相應の愛嬌なるが故に之を所望すと云ひて恰好ならん其の譯故には彼等西洋男子の中に心掛あるものが日本に來り何かの縁にて吾が日本の婦女子を迎へんとするよある時には其の趣味西洋にあるとは一變し矢張り日本流の女らしくしほらしき可憐なる方を撰ぶによりて之を知るべし

左れば日本男子が西洋に渡りて其國の乙女を娶らんとする時には丁度前の依と表裏して彼は日本に於て所望すると全く相反したる婦女子を撰ぶ之れも亦た實際屢々として衆の見る所なり故に男子が女子を撰ぶに當りて如何なる心掛を存すべきか其の可とするものに對するの理想趣味は常に如何なる、きか等の問題は無論の事とし殊に東洋男子を西洋男子に比べて其の可とする女の好みが無下に野鄙なるやうに言ひ做すは大誤謬なるよを承知すべきもの也。

文明の家風とは何ぞや

新たに一の家風を起すと云ふとは容易ならぬと也。家風は家の風采にて其の品格のごとし、之を其家固有の性質となし、長年月日決して衰ろへず消えざるの特色とせんとするには、之が爲め日々夜々に刻苦して、積年の労を積年に蓄積したる餘習に出でざるなし。朝起き、夜仕事は申すに及ばず、投機不正直の儲か出世をもとめず、正直に艱難し、久しく燈の下の力持を爲し、分外の榮利を斥け、不時の幸福に驕ろくとはく、小さくとも大きくとも大には關せず、只だ自家を天與の技藝として、其の守り、其の修繕に不断をこらし、自慢に心血をそゝぎ、大切に骨をつき、障子一枚にも文明傳來の技術を誇ふる心掛にて、朝々、夕々、夜々、日々の苦勞荷しくみせざれはこそ初めて一の家風と云ふもの成就す。而して此の家風の中に生育し、多年の感化を此の間に蒙ひたる子孫

は、世上所々の誘惑などに惑はさるるとなし、或はさるるとも遠からず撥回すべし、之れ、父祖が苦心したる家風の家の子の久しく陽報を受る所以なり。

從來家名を重んじ、血統を大切にしたる所以の主旨は、此邊に存するとなるに、單に、名と貨とを受嗣ぐとを考へて、父祖無形の餘脈を遺傳せんとを心掛けざるは、愚ろかなりと云ふべし。

今や、戸籍法一變し、日本の家庭、其の趣むきを轉ぜんとすれど、家風盛衰の道に至りては、千古万代、苟しくも變ずる所なけん。心あらん青年男女、家を起すに輕忽の思ひあるとなかれ。戀々たる痴情、スヰートホームの歌、テーブル椅子などの準備にて、文明の一家は出來ぬもの也。今や、生物學明らかとなり、遺傳論嘖々たり文明流の家を起し父嗣がんとするものは常に其邊莊嚴の用意あるべき筈にはあらざる乎。

江月去レ人只數尺。風燈照レ夜欲二三更一。

獵官獵婚何れか醜

兎を追ふ獵師山を見ず、ドラ猫を追ふブチ穴を忘る、色慾煩惱に身をこがし、火宅の苦しみに自から落入るもの、人畜孰れか差別を知らん。茲に獵官熱と云ふとあり、六尺の男子自から守らず、權勢の自から煥發するを待つと能はず、自から價を定めて而も不相應に賣らんとす、其の醜くきは言ひがたし。之と相似て可笑しきは、獵婚にてあり。獵婚の中の可笑しきは、つまらぬ男子の淑女を要めんとするにぞありける。左れど、單に可笑しきのみならず、嫉惡、嘔吐の情に堪へざらしむるは、女が妙に秋波を送つて、自から獵婚せんとするにぞありける。男の氣の早く誤解するも馬鹿らしけれど、女の兎角人の信切を我婚事に解釋するは、抑そも自身を如何ほどの美人と心得居るにや、滑稽の甚しきものと云ふべし。辭はを寄す、世上の淑女、汝は最后に至る迄、自からの婚事の故と解するなかれ、其の覺ると彌よ遲きは、其の價を增す。餘り速かに身の事と思ふは、價格の三分二を落すもの也。獵官、賣婚、笑止なると一つ也。

面白からぬ女

女にして面白からぬは。自から美人と心得居る女なり、たとひ實際に美くしくとも、其の美くしさを知り居るらしきは、如何にも面白からぬもの也。

吾が知れる友人の言はく、余は未だ曾て美服したる貴嬢子に心を動かしたることあらず、其の美々しげに裝はふが面にくければ也。むしろ茶つみ女、田うゑ乙女、又は、下女、仲働き、茶屋料理屋などに居る女にて、自から不器量なるをば知り迚もあなた方のような出世は出來ぬものと卑下し、固より美服をまとふべき力もなくして、質素に裝はひ作ら、何處となく品格あり、實際のきりやうも備はるに、毫も自から其美を知らざる如き者に動かさるるは屢ば也。故に自家の形しめとする所の點に目はく故お田夫野人の清楚の様子を惚れたる所有れど。之れ誘惑を防ぐ自己の形しめ也、彼の女學生、貴婦人高家貴族の乙女の如きに未だ曾て誘惑の一點だに看取されたるよ非ず」と。此の告白大いに味ひあり。

風流の氣の欠けたる女こそ、ことに面白からぬものなれ。（終）

諂も上手、家政も中分なきに、何故か毫も人の情を引くとなきは、其の文雅の趣味なき故にぞありける。但し文雅の情と學者ぶるとは正反對の事あり。物の哀れに動きて、草木の露に涙を落すごとき、優しき氣色を言ふなり、吾人常に曰く、雜巾を縫ひて歌をよむと是れ家政主婦、風流の心得たるべし。

騒々しく、ガチヤ〳〵として、床しげに、恥かしげもなき女こそ、歎かはしけれ、就中、女には一種の恥かしみを總とす。之を清き慚恥の情と云ふ。

何事も心得たるらしき顔して、精を自分の功に歸し、常に老婦人の見識にて、人に指圖せんとする女など、無論、片腹いたきものの際長なり。

風に動かされても枝は折られず、花は開きても姿を保つ風情こそ女には善けれ。何やらん何處にも締りなく、ぺた〳〵と道づき、毫も毅然たる守りのなき女など見るも詐らはし。面白からぬ女など、妻にすれば、彼方も面白からぬ男なぞと反抗やせんか　夫にてお互に切磋の功を積むなりけり。

講義

老子女訓（中）

◉知其雄、守其雌。爲天下谿、爲天下谿、常德不離、復歸于嬰兒。知其白、守其黑、爲天下式。爲天下式、常德不忒、復歸于無極。知其榮、守其辱、爲天下谷。爲天下谷、常德乃足、復歸于朴。

◎雄と雌とを較ぶれば、雄は勇ましく、美々しく、威猛高に身を構へて、主人公の權威を存するゆゑ、雌は丈も低くく姿も質素にして、恐る〳〵其の後りへに隨ひゆくなり。之を人生の日常に當てて考ふれば、其の勇ましさ、美くしさ、蹈平凛然として弱きを保護する爲躰、全たく鳥の中の雄の如くなるにも係はらず、人に對しては恭々しく卑下し、人中に出ても、先んぜんともせず、大きな聲を叫びもせず、只從順にして人の後りへに附屬し、牝鷄の如く、謙遜なる謹しみに深き人あり、之は眞とに君子にして、喩へば、地界の中の谿に似たり。谿は身を低くくし、あらゆる汚水を引受け、人の目につかぬイヤナ所に屈托して毫も怨みとせざるものなるが、前に謂へる如き君子は丁度、此の谿の如きものである。夫か、知らぬが佛けと云ふ鹽梅に、生れ乍ら、何の伎倆もなく、生來、人の後りへにくッ付くの外なき程の者ならば、寧ろ當然の運命とも言はうが、身は之れ人の前に立つ丈けの價値もあり、又其の方策も心得乍ら、深く謙遜して雌鳥の從順なる如く、タヾ〳〵後ろから附いて行くと云ふは、更に一層の美德である。即はち是れ、其の雄を知つて、其の雌を守ると云ふもので、斯る人は、天下の谿となるとである。

◎天下の谿となつて、天下の低きに安んじ、天下の汚水を引受け、彼の高山の如く高ぶりもせず、彼の平原の如く廣がりもせず、常に忌なことを身に擔當して、人に目立ぬ所に身を置くとを嫌はざれば、人道の常德はいつもチヤンと身に備はつて居るであらう。凡そ人は善性なるゆゑ、たとひ惡人と謂れる程のものでも、折々は德に歸ることもあるが、其德を常にして間斷なく一身に存し、所云ゆる常德がいつも身より離れぬと云やうなるとは、仲々難きものであるが、彼の謙遜

にして、人の悪がることを我から進んで為し、人の争そふ所には我から後れて随ふと云ふやうにする人には、此の常徳がいつも備はつて、決して離るゝ事が無い。扨て、此の常徳が備はつたる人を如何なる人かと言へば、丁度赤兒の如きもので、赤兒は即はち、人の常徳を存するの姿である。其の無邪氣、其の無慾、其の無理をせぬ所、其の天眞爛漫にして不識不知、毫もまじり氣なき所は、全たく常徳の存して居る時儀である、基督は、幼兒の如くならざれば天國に入ること難しと云ひ、孔子孟子の如き、つねに赤兒の心を云ふを貴とされ、佛說にては就中其の無邪氣な所を賞美して居る。彼の先に言ひたる如き君子には即はち赤兒の心を存するものゆゑ、其の徳は大きく、其の功は高けれども、其の常徳の隱れざる所から言へば、嬰兒に復歸したなど申して宜しいのである

◎雌雄は先後する所から言つたのであるが、明晰、暗昧、著名不著名などの上から比較して言へば、白と黑との相違がある。人大概は、其の白きを欲して、黑きを好まぬ。可成く人にも知られ、世にも目立ち、一見して明白々たる如くあらむことを好むが人情なるに、身は反つて其の黑を守りて白を避

ける。其の白となるべき方法も心得、其の白となるべき資格はあれど、わざと白を避ける。即はち、其の白を知り乍ら、反つて其黑を守ると云ふものは、天下の式となるべき人物である。天下の人は只だ但だ身から顯はさんと計りして居る。宣傳、告白、廣告、主張などは、皆な身から潔白を證せんとするものである。誰も〱競つて功を爭そひ、名を爭そひ、地位を爭そふの世の中に、身づから黑を守つて人の注意より遁れ、全たく名と品格とを隱して寧ろ惜しじと思はぬ人物こそ、天下の式ざなるもので、其の隱れたるより顯はるゝはなし、天下識らずして皆な之を式どし師表どして仰ぐやうになるに相違ない。故に、天下の式となるほどなれば、其人の爲す所の度を超えず、よく常徳にも忒はざるに至るであらうから、して、無極に復歸するものと言ふても宜しいのである。人は道を踏違へることがあるから規則が入る、制裁が入る、限り目と云ふものが入る。然るに此等の入用のない人物は殆んど無極の境界に立つ人である。仁と云ひ、義と云ひ、禮と云ふ如き、夫々善き徳には相違なけれども、既に、仁の名あり義の名あり、禮の名ありて、人の中に白々しく目立つものは

術は限られたる所があると言はねば成らぬ。仁の人は義に於て足らぬかの如く、義の人は仁に於て足らぬかの如くにも思われようが、黒を守つて、之と目立つ徳もなく、名をつけべき徳もなく、只だ常徳の常に存する如き人物は、何如なる道に對するも毫も限られたる所が無い。其と、無極に復歸したと云ふに宜しい。人間の出來た太古に立ち反り、人間の色々の情慾から脱離して、其の本元の純粋なる所に復歸したと云ふて宜しい。即はち、無極に歸つたのである。

◉身は是れ榮與高名を知り乍ら、之に就んともせず、能く其の辱を守りて、惡名を恥とせず、人に屈するを恥とせず、人の爲に汚名を受るとをも厭はぬ如き人物は、天下の爲となると同じとである。天下の谷となつて甘んじて居る人物には常徳常に具足して、足らぬ所が無い。足らぬ所が無くて皆な備はつて居から、人に目立つ道徳の名は無いが、名の無い道徳が即はち大道徳である。木で例へて言へば、柱と爲つたものは、机にはならぬ。箱になつたものは、屋根にはならぬ。夫々皆な便利なものには相違なく、夫々の用向には欠く可からざるものであるが、其の或る用向に必要だといふが、他の事には用いられぬ所で、即はち、未だ何にも形造らぬ新樹の朴に及ばぬ所である。朴は何にでも用ゐられる徳を存して居ながら、また荒皮を冠つて、面白くもない顔色をして居る彼の榮を棄てて、辱を守る人物は、たとへば天下の谷となつた如きものであるから、常徳は常に具足して一つも欠けた所は無く、さりとて之と云ふ目立つた徳を一つも吹聽して居らぬ。所謂ゆる朴に復歸したものである。

◎箇樣に、人の先に立たずして後ろに付き、人に目立つとを避けて、わざと暗きに就き、榮名を人に讓つて、わざと辱に居ると云ふやうにすれば、之と云ふ名のある道徳ではない道徳の本源なる其の眞の徳を身に存するに至るとであらふ。凡そ、道の道とすべきは、常の道に非ず、名の名とすべきは常の名にあらずと申す通り、道徳を爲すにも、之は仁なり義なりと言ひて勉強するようでは、既に一種の名譽心に驅られ左なくとも、既に究屈なる僻に片寄るようになる。道徳の道徳なる所は、道徳と云ふ名も無いほどで、即はち常徳とでも言ふようなるものが宜しい。シテ此の常徳を不斷、身に存し何の高名もなく、目立つて知らるるともなく、谿谷の如く、

低く、昨夜の如く黒く、けづらず、割らざる生木の如く質朴ならんこそ、人の望むべき所である。斯すれば、無極に逆して、之で善いと云ふ限りもなく、殆んど解脱するとの出來ぬ偉大な所に入るとが出來るので、又、色も飾とイヤナ習慣もつかぬ純白無垢の赤子に立ち歸つたようなものである。人間然に至つて初めて道と一體となつたものである。

◎此の心掛は、何人にも必要であるが、わけて婦女子の道徳は斯くありたい。貞女、烈婦などとなるは望ましいとでない。何の名もなき女となるが宜しい。内助の功の内助は、内助の名の無いのである。あの家は女房でもつて居るなどと言はせるようでは、夫の名が出るけど、其人の顔がつぶれるのである。女は女だと云ふより結構な名は無い、其上に形容詞のつくのは、有がたくない。牝鷄は牝鷄で宜しい、形をつくるは、縦はあつても、面白くはないと言はれてある。即はも雌を守るが宜しい。白い表となるよりは、黒い裏地になるが宜しい。何事によらず質朴にして、男子の用に應じ、其の用相應に働らくべき荒木となるが宜しい。チカ〳〵した床柱などと引り成りたがつては宜しくあるまい。総じて此邊の己を

卑下し、己を斯くし、己を愼しみ、名のある目立つ所に顯はれんとせずして、實地圓滿の德を具足しようと云ふ所に力を盡すの道は、取分け女子に對した大切なる戒制であらうと思はれる。夫も、心から卑屈であつては面白くない。能く、雄を知つて雌を守り、白を知つて黒を守り、榮を知つて辱を守ると思ふようにありたい。こゝが教育あり、氣力あり、主張する文明婦人の、朴として質素の道を守る用心の所である。たゞ生れ乍ら愚なるものとなれと言ふのでは無い。

◎人生の事は、丁度反對に出るもので、人の上に立ふとすれば人が下に押込む。人の下に付ふとすれば反つて人の上にあげられる。己の潔白を立ようとすれば、人が色々に言ふが私はどうでも宜しいと言つて居ると反つて人から潔白にしてくれる。こゝが、雄を知りて雌を守り、白を知つて黒を守ると云ふものだ。富まんとすれば貧しくなり、長生せんとすれば早く死ぬる。身を棄ててこそ浮む瀬はありとも言つて、自から無理をせず、自然に放つて任ふの大勇氣があれば、天地と人生とが寄つてたかつて宜しいやうにしてくれる。こゝの大放任、大信仰が眞とに六かしい所である。

新井十内の武藝

◎藝術に達して其の妙を極めた人の話しを聞いて見れば、實に涙の落るを覺えぬほどである。遲鈍なる人間の腕も斯く迄に靈妙となるものかと思へば、たとひ人の身の事にせよ、宛から我身の事のように思はれて、甚はだ賴母しくなる。玆に志州鳥羽藩の劍士新井十内と謂つた人の事を少しくお話し致さう。

◎志州鳥羽に三万石の大名があつて、稻垣信濃守と言ふた。此の稻垣に過たるものが三ツあると言ひ囃して、斯う歌つた。

　稻垣に過たる者が三あり、殿に、朴助、新井十内

殿も名君であり、小濱朴助と云ふ儒者も中々の人であつたが、尤とも名高きは新井先生である。武藝百般に通じて皆な其奧に達したと迄で言はれたが、免許皆傳を受けたお弟子が十人ある。今の北海道長官杉田定一君の義父などは、其の一人であられる相な。然るに、此の十人の高弟を左右に置いて相手にせられる塩梅は、恰かも小兒を扱ふ如くであつたと謂ふ。其の非凡絶妙の程が想像せられる。

◎斯程の先生であるからして、諸國の劍士、天下武者修行の人々は皆な立寄つて腕を試めしたと言ふとであるが、或る時薩州の浪人と稱し、中々の腕前の者が一人來つて仕合を爲た状況は、今尙ほ眼前に見る如くであると言つて話した人がある。此の浪人が勢州に來つて或る社に參詣すると、日の下開山新井十内の額があげてある。鳥羽の稻垣などと云ふ小つぽけな藩士に日の下開山とは生意氣極まる話しだ。一とつ立合つて此の額を引下させてやると云ふ見幕で、新井先生の道場にやつて來た。

◎賴まう!、某はコレ〳〵で一つお稽古を願ひに來たと謂ふ取次だから、新井先生は、コナタに通せと謂つて待つて御座る。スルト、某は恐ろしい様子でやつて來た。何の小藩士の蝙蝠奴、一睨みで抑さへて遣ると云ふ調子だ。新井先生、其の這つて來る様子を一ト目見ると、コラ〳〵と弟子を呼んで屛風を持つて來させ、自分の後ろの方に立てさせた。夫で、

二人相對して暫らく話しをして居る所を見ると、新井先生、度々首を振るようだ。何故今日は彼のように首をお振んなさるとかと、弟子等は只だ不審に思ふて居た。彼の劔客は暫し話しを仕て居るうちに、何んだか大相驚ろいた樣子で、段々顏の色が蒼くなり、トウ〳〵默り果てゝ怨卒引きさがって行て仕舞った。おかしな事だと弟子等が思つて居ると、新井先生は大きに笑つて、弟子等に後ろの屏風を見せられた。よく〳〵見ると、實にゾットするほど澤山の針がビッシリ立つて居た。

コレは、劔士が這入つて來るのを一見した丈けで、其の針吹きなるよを見破られたのであるが、其の一呼一吸の間に吹く針を一本々々自由に避けられたは驚ろくべきよだ。凡そ針吹の上手な人になると、數十本の針を口中に含んで居ても少しも分らん。話しをするにも少しも差支へはない。それで、談話の間だに、フイと吹き出すが、別段、息氣を強くするのでもなく、ホンノ通常の通りで、談話の呼吸に應じて吹き出すのである。而も、其の小さな針が顏面に飛んで來て眼中に突立つので、其の針のサキの一點しか見へぬようになつて居るから、尋常の人には迚も長い針とは見えるものでない。例へば。鳥さしが鳥を差すのでも左樣だ。あの長い竿が見えたならば、如何に寢ぼけた鳥でも直きに覺つて逃げるのであるが、其の竿の差し方が丁度好い加減の角度を爲し、鳥の眼中には竿のサキの一點より見へぬようになつて居るから、少しも驚ろかずにヂット爲て居るのである。針吹の針もさうであるから固より針の長さ丈も見えず、見えた所が無論避けられるものでないが、新井先生は談笑の間だに自由に之を避けた。

〇少時すると、劔客の勝負を願ひたいと言ひ込んだものがある。大方、先刻の奴であらふ、道場に通せと言つて、先生は平氣で其應へ出られた。成程、先刻の劔士であつたが、向ふ劔客、あやだすき、袴のすそを高く引かゝげ、大刀をひんだりに振つて、道場の眞中に構へ、決死の相貌で扣へて居る。新井先生は平常の通りで、フダンの如く鐵扇を一本持た位で出られるようだ。弟子等は少し心配して、御用意あつてはと言ふと、何に之で宜しい、が、先方の劔客を調べて見よと言われるから、調べて見ると何も異常は無い。之は、火箸を折り曲げて手拭の心に入れるなどの事があるから調べられたの

でおらうが、既に敵の真向を鐵扇に打つ時の手加減を仕て居られるのだ。

◎夫で、ヤット言ふた、向ふも大した腕前だ。大刀をスラリ引抜くかと思ふと早くも真向に打ち込み來つた、新井先生、身をかはすともせず、其儘悠然、チヤキリと鐵扇で受けとめた。凡そ斯る時の劍はにかはで引付けたる如くにくつ付き、容易に離れるもので無いが、新井先生は無雜作至極で、其の鐵扇を上下に磨ん、劍の腹を三度撫でた。三度撫でられたかと思ふ途端、ポント一振り拂はれたら、大刀は横の方へカラリ落ちた。此時遅し彼時早し、劍客も左るもの、一歩引下ると見る電光石火に、小刀を拔つ離して、又もやスラリッと打込んだ。新井先生又もや、チヤキリと受けとめて。又々初めの如く、三度上下に鐵扇で磨られた。シテ、又、ポント拂つて小刀を落とす途端、早くも敵の額に一本參られ、血がタラリッと流れた。此時の叩き塩梅は既に先刻から勘定の中にあるので、もし火箸でも這入つて居れば、それ相應に打たれたので、痛さは矢張り同じとであつたらふ、殺すのには少し惜いし奴た」と言つて、微笑されたと言ふとだ。

◎今一つお話しするが、先生或る時、十歳計りの孫を連れて散歩せられ、或る茶店に休まれた。スルト、江戸下りの相撲取りが三人先刻より酒を飲んで居たが、此時大分酩酊して、新井先生とも知らねば、暴言を吹かけた。ナア、武士と謂ふ奴は、長いものを二本差して居るものの、力と言へば、カラツキリ、ありやしない、あんなコケおどしをわざ／＼差して馬鹿な御苦勞さまの事だ」なとと言つて段々嘲弄した。先生は氣にも留めず、ニコ／＼してあやまつた居られたものだから、力士は彌よ善い氣になり、ます／＼つけ上つて無禮の事を言ふから、新井先生も致し方なく、相手になり、ナア、力士と云ふものは、躰斗りデク／＼肥つて居るものの、カラツキシ何の役にも立ちやしない、あんな家おどしの大きな躰をもつて、馬鹿な御苦勞さまの事だ、鸚鵡返しの冗談に、力士はヤツキとなつて掛つて來た。

◎新井先生の言はれるに、ナニ、ワシがお前方の相手になる迄もない、先づ力士が役に立たん眼前の證據は之だ。コヽに居る孫は十にも成るか成らんだが、お前達の力では、迚も之すら投げるとは出來まい、出來るなら投げて見ろと言ふのだ。

ナンノ、コンナ餓鬼が相手になるものかと笑ふから、イヤ決して投げられぬ、投げられると思へば投げて見よ、サア、孫よ其處に立てと言つて立たせた。新井先生は一間半も離れた所に腰をかけて見て居られる。夫れで、力士もちと馬鹿々々しいが、醉つては居るし、一投げに投げてこまそと言つて掛ると、コロリツと倒れた。ヤ、己れは醉つたなと言つて、再たび掛ると、又、コロリツと倒れた。茫然として驚ろいて居る。外の力士は、腹を立てて、何んの様だ、小つど理りの酒に醉やあがつて、サア、退け、己が投げてやると言つて掛ると、又、コロリツと倒れた。之は不思議だ、何んだか馬鹿にならぬぞ、まて〳〵お相撲様の本色にやるぞと言つて、レコを踏み、ヤアー、アターラツと言つて、ポンと突いて掛ると、コロリツと又倒れた。而も、孫は少しも手を出さず、只だ突立つて居る許りだ。

○茲に至つて、彼等は大いに驚ろき、之は人間ならじと思つた。夫は、力士の正直な所だ。アナタは何もの様ですかと聞くから、己は鳥羽の新井と云ふものだと言はれた。成程、新井先生ならばと、初めて氣が付いた。之は、氣合ひと云ふので、手をつけずに投げられたのであるが、之よりして、新井先生は、手もふれずに人を投げられると言ふ大評判が立つたと言ふとだ。

○以上二つの例で、他の事が推察される。武術の上達は驚ろくべきことで無いか。此の鬼神の如き新井先生も、初めは東海道で、雲助にいぢめられ、武士としてあるまじき恥辱を受け、必竟、武藝を知らぬからだと思ひ、茲に初めて感奮して夫から江戸に出で必死の修業をされたのである。固より天稟もあつたとではあらうが、夫より一代に斯程の名人となられた。之は武藝の話しであるが、ひとり武藝にのみ限るものでない。人の藝術は皆なコウデ、何れも刻苦すれば其の奥に達するとが出來る。奥に達して妙を得た所から見ると、人間も斯迄達となるものかと思はれて、坐ろに感涙を催ふさせる。人は自縄自縛が、第一の禁物だ、感奮、志を立てて、何事にせよ、其妙に達して見たいと云ふ心掛から勉強して見れば、多年の間だには必らず成就するに違ひない。成就して見れば、何事でも同じとで、皆な非凡卓越の人許り分る消息が自づと分つて來る。ある上手な仕立屋が仕立てた單物は、襟から裾まで

を一とつ引張つて立てると、其まゝ直立したさうな。上手な料理番が庖刀を揮つて掛ると、肴の腹にあつた火箸をブッリ切つて仕舞つたと云ふ實話もある。家政の事にせよ、些末の事にせよ、何事にも慣れて熟して其の妙に達して見ると、何とも言へぬ面白味のあるものだ。詩、書、香、花などの事に至れば、尚更らの事だ。どふか人々が感銘して必死の研究を爲されたいとである。

雜録

横井小楠（中）

（二）品情操

小楠を傳するもの、小楠遺稿に附録したるものに過ぐるはなし。中に云く、

先生、史傳を渉獵し好んで古今の治亂興亡の迹を見る、身其際に遭逢する者の如く、議論人意の表に出づ。

先生國に歸り、門を閉ぢ、客を謝し、堅苦刻勵、心を經傳に專らにす、家素より貧、其居室僅かに六疊の壽壞懷破障竹を編みて椽と爲す、而して晨夕水を汲み、飯を炊き、一家の勞を助く、其勤勉人の堪へざる所なり、然れども先生厭色なく、亂帙の間に起臥し、年の移るを知らざる者の如し。此の如きもの殆ど四年、一日慨然として云く吾之を得たりと。此後子弟を敎る其大要に曰く、道德は經國安民の本にして而して知識に由て進む、是故に孔門大學の敎、格物致知を以て先きとす、己を修め人を治る內外二途の別無し。

先生巡遊、既に歸り浩歎して曰く、天下人無しと、慨然自任するの志あり、是より先生の體段識見共に高きを加ふ。其の斷然開國の論を唱ふる比はひや、曰く、天地の氣運、万國の大勢は人爲を以て。私す可らざる也と。

先生初め伊洛の學を信ず、後ち伊洛の諸賢經綸に乏しきを疑ふ、而して后ち迴て孔孟を信じ、直ちに堯舜を祖述す、終に大に發明する所ありて后ちただ天と說くのみ。門人の敎育只だ其性質の長ずる所に從ひ循々として道に入らしむ常に曰く、規律は死物のみ、死物を以て活人を御す、或は

之を外面に行はしむべし以て闕徼の門に行はしむ可らず、或は之を門内に行はしむべし以て門外に行はしむ可らず。其の風采氣格を狀しては曰く、

先生身材中人に及ばずと雖ども、容貌魁岸、眼光烱々、一見して其偉丈夫たるを知るべし、性質聰明にして思想に富む、加ふるに非凡の識見を以てす、氣宇豁達、神氣爽快、困迫の中に在りと雖ども憂色無し、人に接するに胸襟を披けず、讐敵嘗て我を敵視する者と雖ども、來れば即ち釋然たり、音吐朗々として諄々感應を生ず、人を教ふるや懇篤に倦れず、談笑閑話の中、能く其情を盡し其意を吐かしめ、其思くさゝる所を導き足らざる所を補ふるの資格を得せしむ、其怒るときは儼然一聲以て人をして冷かならしむるの概も、一喝雷過て衆人を畏るが如く、寸毫も說を留めず、又事を他に公さしむるや、人をして其指示に出るを忘れ、其自から思慮し得たる所を公すが如きの感あらしむ、又卒然親に事ふるに尤とも謹しみ、人を愛れむよ尤とも厚し、然れども、議論推行一世潮流の外に出るを以て合するもの極にして生涯殆んど坎坷の間に在り、晩年家人子弟を戒しめて曰く、吾常に世と趣向を異にし他の指目する所となるも其免れて今日有るは蓋し天幸のみ、假令ひ吾今日非命に終るとも敢て或は復仇を謀る勿れと、言遂に溢を公す。

（三）學校問答

「學校問答」は、越前春嶽公に答ふる所なり。中に云く、

和漢古今明君出で給ひては必らず先づ學校を興し給ふ事にて候、然るに其跡に就て其效に學校にて出類の人才出候ためし無之、況イや是より教化行はれ風俗敦く相成候事見え不申、人才を生育し政事の有用に用ゐんとの心にて、此の政事の有用に用ゐんとの心直様一統の心にとはり候て諸生孰れも有用の人才にならんと競立、名實公己の本を忘れ候。人才を生育し有用に立んと欲する心、主になり候て其實は學政一致にて無之候、其即はち人才の利政に相成候所以にして古今明君の通病にて候。政事と申せは直に修己に歸し、修己は即ち政事に推し及し、修己治人の一治に行はれ候處は、唯是學問にて有之候、

其故に三代の際道行はれ候時は、君よりは臣を戒め、臣よりは君を儆しめ、君臣互に其非心を正し、夫より万事の政に推し及し、朝廷の間、欽哉戒哉念哉懋哉都兪吁咨の聲のみ有之候。

朝廷と講學と本より二途にて無之候、唯だ朝廷は職掌あるにかぎり、學校は貴賤老少を分たず、學を講ずる所に候設は、學校は朝廷の出會所と申心にて是則ち學政一致なる所以にて有之候。

側用人、奉行、教授の三職は元來一體にて、人々をして司らしむれば、自然に一致ならざる勢ありて、其末必らず弊害を生ずる道理にて候、故に此三職は必らず一人をして總べ司らしむれば、宮中、府中、學政、一致に相成り情義通じ、隔絶の憂無之のみならず、學校の勢ひ自然に重く相成可申候。

嗚呼、學校の本色、學政一致の大道を論ずる、如此く平易而して如此く明晰なるもの多くあらず。眞に當代の卓見と云ふべし。今の文政を言ふもの、學校の外に眼力の及ぶはあらず、而も其の學校とは、章句譯述の庭なり。嗚呼、學問の眞を失ふ亦た久しき哉。

（四）遊學雜志

此の篇是れ先生壯年江戸に遊學せられし時の雜志なり。此時此年にして而も觀察超凡、眞とに一代を拔くの識見あり。之を今日にするも尙ほ多く政士の思ひ到ると能はざる所のものなり。其の德川氏の勤王心を言ふや曰く、

去年の冬、右大將樣御筒にて鶴をば獲物有りて將軍樣に被獻たるに、將軍被仰出には、未だ京都に初鶴不被獻れば、召上られざる旨にて、其事と無く西丸に被獻しに、大御所樣御同樣の思召にて其鶴終に腐れしなり。是の一事にて、關東の京師を御欽敬被遊る事は知れるなり。二百年餘の太平此に基きたると乍恐奉敬承なり。

其の江戸政事の樞機を觀察するや云く、

御吟味役は天下郡國の貢賦を司り、貨財の出入は元よりにて、諸侯の上納米御手代等何事によらず出入に預るとは御勘定の詰まへなり、其故に御郡代御代官等は總て御勘定奉行の支配にて、政事第一の大局なり、此の大局なるに、御

奉行四人、吟味役五人にて勤めらるれば、費用は知らるるなり。

御城御役人の人數、御老中四人、若年寄五人、寺社奉行五人、大御目付六人、町奉行二人、御勘定奉行四人、同吟味役五人、御作事奉行三人、此にて天下の政事治るは簡易可想なり。

其の旗本の無文學を憐しみ、遂に俄然一變するや云く、旗本にて、政事の格式古實又は是非黑白の議論杯に心懸は極稀のとにて、予竊かに思ふ所あり、旗本の人に交り、彼是に心を付け、是迄考へ來りて、近日斷然と疑晴れたり、前に云ふ如く、御役人其は至て簡易にて、旗本凡八萬騎より目當るに、所云ゆる千言とも云ふ可らず、夫れは望み欲しても出來ざるとなれば、誰か御役人に目當て其趣向に志ざして學問する者あらんや。故に旗本は武事專ぱらにして、文事は甚は不練なり。況して御政事是非の議論杯は一切なきとにて風俗の樣子大に議論と異なるなり。因て又考ふるに、人本來智慮あれば、格式古實又は政事の議論に心懸けざれ共、事に臨み時に當り自ら恰好の分別有て、時宜に的當するなり。即ち御三代の時、政事を執り名譽の聞ありし酒井空印、松平伊豆公の如き、總て自然の智慮を以て二百年泰山の御政事の基本を立られしなり。されば、政事は從來の智慮あるとにて必らずしも學んで出來るとに非ずとも、其の智慮ありて世故に熟練の人にて學ぶときは甚だ益ある也。又嘗て考ふるに、政事の上に出る善惡となく下たる者謹んで其命を承け、嘗て異議せざるは、江戶の風俗にて是を要するに今日治平の象、此にて見るなり。

因て又考ふるに、政事異議の起るは、市人に非ずして士大夫にあり、然るに旗本の風專ぱら武事に心懸け、嘗て政事學問に志ざゝざるは即ち前に云る如にして、役人の善惡才不才共に旗本に與ると無れば、固より異議を言ふ可きとなし。或は役人に望みあり、彼取て代んと欲するの風俗なれば、必らず異議の起るとにて、善なれば善にして種々と唱へ、惡なれば惡として又種々と唱ふは、譬へは女の嫉妬の如く、善惡につけて異議する也。是政事の大なる害にて古今天下國家の衰亡此に基せざるはなし。然るに旗本の風俗彼が如くなるは、要するに役人の少く、武官の數夥しく

御足を出さるゝに出でたる御政事にて流石に感じ入りたるなり。

政事の秘訣を看得し、輿論箝遏の工夫を察し、徳川氏の樞機を觀破する尋常政士と同日の比にあらず。今にして尚ほ徳川氏の非勤王を論じ、諤々たる政論をもて國政に必要なるかの如く言ひ做すもの多きに際し、小楠先生一書生として江戸に遊學するの時、看破既に如此し、豈に卓見にあらずや。

(五) 講義類

小楠先生の講義は義を講じて神に通ずる也、章句文字活動して、自から發揮す。喩へば隠君子を誘引して白日稠密の間だに紹介するが如し、其人にあらざれば能く此人を誘引すると能はざるならん。玆に其解義の説若干を抜摘せんに、

論語學而之章　吾心をして日々靈活ならしむる是則ち學問にして修行なり、堯舜も一生修行し玉ひしなり。

今に朱子を學ばんと思ひなば朱子の學ぶ所如何んと思ふべし、左はなくして朱子の書に就くときは全く朱子の奴隷なり。

我方より有徳の人を聞かば、遠近親疎の差別なく親しみ近づきて咄し合へば、自然と彼方よりも打解て親しむ、是れ感應の理なり。

勞力の積りて信從するもの多く、一代の碩德と云ふべき程の人才にて世に用ひられず逆境に逆ふとき少しも慍らざるこそ眞の君子と云ふべき也。

陳平　正しき智ならば餘り有る筈はなし、餘りありと云へば唯だ不用の智と云のみならず、反て有て害あるの義也、今より想像するに、當時陳平一人朝廷に在て機智を巧にせしゆゑ、滿朝の士太夫自然と氣味の悪しくなり、皆々身用心をいたし、前後を見合せ、易簡正大の風は日に薄く成行しと見えたり。

嗚呼陳平の如きは、所云る後世の人才にして、古の小人なるもの也。

(六) 沼山閑話

元田永孚氏は氷川伯の所云ゆる熊本第一の人なり。此人にして閑話の緒を引く、小楠先生當日の風貌眼前にあり、云

く、

堯舜三代の心を用ゆるを見るに、其天を畏るゝ事、現在、天帝の上に在せる如く、目に視、耳に聞く、動揺周旋、總て天帝の命を受る如く、自然に敬畏なり。別に敬と云ふて此心を持するに非ず、故に其物に及ぶも、現在天帝の命を受て天工を代むるの心得にて、山川、草木、鳥獸、貨物に至る迄で、格物の用を盡して、地を闢き野を耕し厚生利用至らざる事なし、水火木金土穀、各其功用を盡して、天地の土漏るゝ事無し、是れ現在此天帝を敬し、現在此天工を亮る、經綸の大なる如之

堯舜三代の畏天經國、宋儒の性命道徳とは、意味自から別ある所あるに似たり。後學のもの徒らに理學の說話にのみ務りて、現在天人一體の合點なければ、大道頭に行ひありて、事實の上に於て道を用ざる事多し

孔子、何が故に周公を見玉ふらん、彼を言はゞ、堯舜文王も在せば、周公に限るまじ、周公を見玉ふと意味あるべし、三代の治道周公に至りて大備せり、孔子天下經綸の志にて、其周公を慕ひ玉ひし故、別けて周公を夢に見玉ふなるべし。

伯夷の事、後世唯だ一箇の潔白人と思ふと、孔子の說には合はず。文王の時、既に三分の二を保ちたれば武王に到りて、殷益小弱なる事、知るべき也。此時に當りて時勢を以て云にも、何ぞ殷を伐つに及ばんや、文王の如く只だ徳政を修め、民を恤み、紂王は紂王にして存し置かば、自から衰ろへて終るべし。

張子房國に不相の人家なり、韓の爲に仇を復し、高祖を助けて天下を定むなど、固より其本意に在る可からず、堯舜の世と雖ども、仕て臣たる人に非ず。

小松内大臣は、大賢以上の人、顏子の資なる可し。

（七）沼山對話

故井上毅君熊本藩時習館の居寮生たる時、小楠先生邪宗信仰の有無を探らんとて一訪す。對話長時間、波瀾あり、起伏あり、窮まつて又通ずるあり、既に三寸の蛇、后年の井上毅を顯現し、蜿蜒曲折、旗を叩いて尙は止まざるの概あり。其の辭して出るや、小楠先生目送して曰く、惜しい哉、

與が如き才筆者をして吾儕に侍せしめ、吾意見を筆記せしめざることを。毅君亦后年、人に語りて曰く、此時冒頭先生が讀書以外眞學問の骨底を喝破せらる、霹靂落下、天外の調あり、余は此時直ちに叩頭して弟子たらんことを乞はんとせしに、但だ秘密探索の一命を蒙むることありしの故に遂に若せざりしのみと。沼山對話は、毅君自から當日の對話を筆記せられしもの也。中に云く、

孔門、三千の徒あり、而も書の讀むべきは詩書を第一としたるものと被存候。然るに、孔子、伯魚に御敎示あるを見るに、詩を學びたりや、又周南召南を學びたりやなど特更に仰せられ候、其口氣を以て考ふるに、孔門の學問と詩を誦し書を讀むを以て第一の事となすには非るものと見え候。書經に、堯の德を稱して、文思安々と申したり。此の文思の字、學問の眼目にて、古の學は皆な思の一字に在ると知られ候。凡そ人心の智覺は誠に限なきものにして、此の智覺を擴むれば、天下一物として我心に遺す所はなきものに候、心の智覺は即ち思にあることにて、思ふて其節を會得いたし候はば、天下の物理皆な我物に相成申ことに候。

博學明辨共に皆な思の字の小割れにて、其實は思の一字にて、學問大端を包めり、全體、己に思ふの誠なければ、後世の如く、幾千卷の書を讀候ても、皆な帳面しらべになるものに候。先づ書は字引と知るべく候、一通の書を讀得たる后は、書を抛て專ら己に思ふべく候、思ふて得ざる時に之を古人に求め、書を閲するほどになるものに候、左樣致し候はば、我智覺も日々にひろまり、學問の精神ひたすら増長致すものなり、己に思はざれば學問の益なく、又思ふに是を古人に照らさゞれば、一己の私智になることも御座候故に、思而不學則殆とも有之候。

我思のかゝる處、宇内にかけて皆な我が分内といたし候故、宇内の事皆な我心竊かにひゞき候て所云ゆる格物も皆な空理に相成不申。

仁の用は利を以て人に及ぼすにあることに候。仁の体は固より己に在て仁の用は利物にあることに候。

古今勢ひ異なり候、勢に隨ひ理亦同じからず候、理と勢とは、いつも相因て離れざる者に候、今日の勢あればこ

今日の理あるものに候。

只今に至りては、万国皆な人の国を奪ひ取るなどの事は仕らず候。七分の合戦より、三分の交易は莫大の利にて候へば今に断絶致候はゞ、必らず戦争に及び可申候。

学者は、朋党の弊を去るべく候、今日箇様に講習すれども、明日に相成候へば、直ちに出に相成申すものに候。

党派の別には目を付けず、只だ其人才を見立てゝ、之を抜擢いたし候へば、党派は自から消するものに候。

凡ぞ小人君子と申すは、百に一ツ位ないに在るものに候、其餘は皆な不肖輩にて候、然るに直ちに小人の名目を与へ、其長を捨て短を責るは、己れ即ち小人にて候、是を以て小人責小人にて候、小人ぞ申す様なる人には、吾等交たきとなり、是れ第一、己が修行にて候。

嗚呼、真学問とは即ち是れ歟。神智世徳の人、近代先生を推す、所云ゆる活儒の活用話なるもの、先生に於て之を聞くことを得る也。

「といふ」録

泡鳴子

○ゴルドスミスはアイルランドの人、始めて倫敦に来るや、頼るに友なく、宿るに家なし、その服は破れ、その嚢は空し。諸方を乞ひ歩き、人の軒に眠ると数日、或種屋の小使となつて少許の金を得、シャツと上衣とを購ひ、漸く外科医の看板を掲ぐることを得たり。近隣の女房等は大にこの新来の先生と親み毎朝二階を掃除する度毎に、必らずその窓より首を出して、先生の状態を察すが常なりしと雖も、一朝おのれ等の病に罹るや、直に他より医者を迎ふるに躊躇せざりしといふ。

○カライル一日夫人を携へて、観劇に行く、帰へるに及んで夫人を見失ひ、ひとり帰路に就きしが夫人の遅れて帰へるや、恰も之を忘れしものゝ如く、書斎の机により居たりといふ。夫人また温順貞淑、夫の屡々斯る事あるを怨ぜざりしといふ。

○カライル夫人をウエニイユルシユといふ。蒲柳の質、病床にあること屢々なり。或日習慣の如く馬車を駆つて公園に出づ。

手には一卷の書を携へたり、殆ど二時間にして門前に歸着し御者は帽子を脱して車の扉を開きしに、夫人は後方に凭れたるまゝ、頭を前方に垂れ、書を抱ける手既に冷え氷り居たり。天下の一文學者は直ちに寡夫となれり。

◎ジヨオヂエリオツトの始めてその名著「アダムビイド」を公にするや、ナンイートンの人之を購讀し、書中の言語風物悉々くおのが地方に屬するものなるを知り、著者は必ずナンイイートンの人なるべしと推斷せり、當時同地にリツキンといへる傳道師あり。鹿爪らしき顔つきはすれども、常に或野心を抱ける者なりしかば、人皆之をその著者に擬したり。是に於てリツキンの名忽ち龍動全都に迄も廣がるに至れり。古今大事を爲して名聲を著はせし者は多しと雖も、無爲にして大名を博せし者、リツキンの如きは未だ稀なりといふ。

◎エリオツトのハアバアドスペンサアと相知るや、獨身男女の交際に許さるべき限りの親密、寧ろ愛情を盡せり。而してスペンサアがジヨオヂヘンリイリウスを紹介するや、エリオツトはその小男にして容貌醜しく、齒は總躰にその列を亂し、無政府黨員の如き頬鬚あるを嫌厭せしが、リウスよりその著作の校正を依賴せらるゝに至り、彼のなか〱立派なる精神あるを知り、エリオツト(當時のエバンス孃)の仕振は大に變化すると同時に、リウスも亦昔日のリウスに非らず、その顔は改良せられ、その髮は刷新せられ、その汚穢なる首卷は暇を貰ひて新しき物之に代るに至れり。幾もなくして兩人は合卺の式を舉げ、獨逸に向つて新婚旅行を爲したり。「總合哲學」の著者は之を聞て默せしのみ、而して今日に至る迄彼は「科學と結婚」せりと稱せらるといふ。

◎ビクトルユウゴウ一婦人の助けに依て逮捕の難を免れ、ブラツセルに至り、ゼルシイに轉じ、後またゲルンセイ島に移るや、茲に住すると十九年。此間こそ彼の文學に於て最も榮光ある時なりしなれ。始めは借家して居りたれど、その家大に彼の心に適ひしかば、遂に之を購求せり、然るに此家に關して古き傳說あり、嘗て殺害せられし女の亡魂今に是を去らず、深夜月落つる頃、幾多の亡魂を伴ひ來り、書齋の屋根なるがらす窓の上に舞蹈を爲すといふ。故に一人の之に住するものなく、ユウゴウの來る迄は長らく空家なりし程なれば、之を購ふに當りても幸に甚だ廉價なりしといふ。

◎サッカレイの米國に渡り、未だその所用を辨じ終はらざるに當り、新聞紙を讀んで偶々一瀛船の英國渡航廣告あるを見、懷郷の情眷々として禁ずる能はず、一友の最も親密なりし者に萬事を托して、匆々にして歸國したりといふ。

◎佛人は道に葬禮に遇はゞ、必らず帽子を脱し、未だこの災害のわが身に及ばざるを、神に感謝すといふ。

◎或人の統計に依れば、英國に於て五十尺以上の紀念碑は、皆大殺戮者の爲めに建てられたるものなりといふ。龍動市中雲烟の間に聳ゆる四個の大碑も、一は多くの生魂を亡滅せし千六百六十六年の火災を紀念し、他の三個は又戰爭に依て名聲を名たる軍人に屬せり。殊にヱリントンの碑に至ては、數百万人を殺戮してナポレオンの軍を撲滅せし功勞を表するものなり、而して茲に二個の例外あり。一はアルベルト紀念碑とて、その夫人の愛情を表せん爲めに建てしもの。一は又一釀酒家の死に臨みて三十万ポンドを慈善事業の爲めに獻ぜし紀念たり。然れども、後者も亦、その大金は、酒精を以て幾千万の生靈を亡し、又は亡すばかりの害を與へて儲け得たるものなりといふ。

視察記事

櫻井鷗村

余の中國九州に女子教育及女風俗の觀察を思ひ立ちて、帝都を辭せしは、正に六月九日、即ち東海道鐵道線路の復舊工事成るを告げたる其日なりき。而して旅中一ヶ月有餘、經來りたる地僅に京都、大阪、神戸、岡山、松山の五に止まる。此行、大阪に在りし時、郷里松山に於て、第四弟の急病にて長逝したるの悲報に接したるを以て、且新墳を弔ひ、且つ父母弟妹を省せんが爲に、日程を變じて、急に郷里に歸りて留まる數日、人も止め我も心殘り多きが中に、涙を揮つて之を辭し、此地より直に九州に向はんとの志ありしも、旅期既に滿るに近く、加ふるに炎暑酷威を加へ、女學校また暑中休業をなすもの多きを告げたるを以て、一先見合せとなし、乃ち岡山に入りて、それより再び阪地に歸り、京都を經て、七月廿七日京に歸れり。されば這回の旅行なる、最初豫期の十一をも果すと能はず、觀察の結果擧げて數ふるに足らず、即ち以て世上に報告するものに乏しき雖も、なほ觀察し來りたるものゝ要略を述べて以て聊か讀者の久望に答へ、且又、經過地方の有志諸君の厚情に酬いんとす。而して旅中得たりし雜多の感慨は、別に之をものして世上の一覽を乞ふべし。

●神戸

◎其の女學校

神戸は女學の早く開けたる地にして、以前は關西女子教育の要處たり。其神戸女學院の如きは、殆ど廿五年の昔に、組合教會派の女宣教師等によりて成立したるものにして、久しく西方女學の頭腦なりき。神戸には基督教主義の女學校三あり、即ち上記の神戸女學院と、松蔭女學校（英國々教會派）と、婦人修藝學會（メソヂスト教會派）となり。他にまた羅馬教會派に屬する眞光女學校なるものあり。宗教以外に立つものには、須磨の人友國ヘル子の校長たる親和女學校なるものあり。

而して兵庫縣下には、未だ一の高等女學校を有せず。然れども神戸市に於ても、また兵庫縣に於ても、共に其設立計畫中にして、兵庫縣下にては、參事官有吉忠一氏、專ら其計畫に奔走し、既に昨年の縣會に、原案を提出せしも、否決となりしが、今年度の縣會に於てもまた此議案を提出する筈なりといふ。而して市長鳴瀧幸恭氏の如きは、之を縣立となすよりも、無乃市にて建設せんとの考にて、既に建築地をも有する都合なり。鳴瀧市長の意見にては、經營上また地方的感情より離るゝ爲に、之を市立となす方優れりといふに在り。有吉參事官の新設方案にては、之を神戸に置き、生徒教員を四百名となすよし。而して現今兵庫縣の女子にして、京阪其他の高等女學校に遊學するもの百名以上なりといふ。

◎神戸女學院　神戸市山本通四丁目

余の神戸に在るや、屢ゝ神戸女學院を訪ひ、其教師諸氏と交誼を通じたり。同院は地位を諏訪山麓、眼下に神戸港灣帆檣林立するを望み、また近く淡路島を眺め、風光頗る佳、其建築物たるや、日本大小の女學校中に數點からずと雖も、其宏大の結構、他に比するに足るものなきの觀あり。音樂館、理化學館等、各近年の建設に成りて巍々として峙つ。校内の設備またほゞ整へり。學科等亦從つて高尚なり。されば其經驗に富めると、其從來の勢力と、現今の設備あるとを以て、今なほ關西女學界に甚だ重きをなせり。曾ては多數の生徒を養ひたりしが、一時女子教育の衰頽と共に一頓挫を來したれども、現今やうやく恢復の氣味あり。分科には普通、高等、音樂、裁縫の四あり。六月中の生徒現在百六名内予科、師範科、本科生十四、五名を有す。其教師は、院長ブラオン女史外外國婦人四名、本邦人十四名（内女子七名）あり。其中大島花子、塚本ふじ子二女史の如きは、共に同院の出身にして、曾て久しく米國に留學し、いづれもバチエラーの學位を有せり。要するに同院の事をいふものは、先づ其學科の高尚なるを擧ぐ。有吉參事官の如きも、高等女學校いよいよ成るの日に於ても、此地にて相對峙するに足るものはたゞ此院あるのみといへり。

◎松蔭女學校　神戸市中山手通

此校は文部省高等女學校の規定に準ずるものにして、尋常小學校卒業後四年の課程なり。本科、師習科、英語專修科、和漢文專修科、裁縫專修科の設けあり。教師は、校長フォーイ女史外に外國婦人一名、本邦人八名中女子五名あり。生徒は六月中界五十名。校内寄宿舍あれども、一名の寮生を有せず、これは校舍の狹隘なるが故にも因ると見え、寄宿舍をも教場に宛てたり。素より同校は英國々教會派傳道會社に屬するものなれども、生徒中一名の信徒もなく、而して余の參觀したりし日に、生徒中一人の束髮を結びたるものなかりしも、共に異樣に感じたり。蓋しこれは寄宿生なきが故なるに因ること多かるべし。學校としては、其世流に適合せんことを求むるによりて、同地市民には多少の信用ありとの事なり。

◎婦人修藝學舍　神戸下山手通

◎以光女學校　神戸居留地

此兩校共に之を參觀するの機會を失したるが、前者は專ら手藝を教ふるものといひ、其技藝に於ては、好評なりとか。後者は居留地内にありて、天主教徒の設立する處なるを以て多く聞えず。

◎親和女學校　神戸市下山手通七丁目

此學校は、以前は眞宗派に屬し、一寺院内に設立せられしものなるが、明治二十五年友國ヘル子の、之を引受けしより、現在の處に小校舍を有して、宗教以外に獨立し、教育勅語を以て德育の基本となせり。程度は尋常小學校卒業後三年なれば高等小學校に近し。學科は普通科、專科の二に分る。教師はいづれも女子にして四名内二名は該校出身者なりといふ。生徒は六月現在百二十名内專修科四十名なり。校内多少の寄宿生もあり。同校は市中にては信用あり、友國ヘル子は教育に熱心なる奇特の婦人なりとて、鳴瀧市長余に語りたり。

神戸には此外に組合教會のヘウ女史の設立したる頌榮幼稚園とて保姆の養成をなすものあり。以上の他には、同地並に兵庫にも女學校と稱するものなし。されど兵庫縣を以て女子教育に冷淡なりともいふべからず、此處より出て、他府縣下に學ぶものは割合に多し。

◎兵庫監獄の女囚

余一日湊川畔の兵庫典獄に西村典獄を訪ひて、女囚の状態を聞き、また其女監を觀たり。女囚の状態さて典獄の語りしものは、嘗て予が本誌四百六十三號に述べたると同様にて、實に持あつかひに困れり、如何すれば其きものやら分らぬさ言へり。女看守は重に舊士族の後家などを採用すれど、此等の如き、温良に育ちし人には、迚もアバスレ極まりたる女囚などを監守し切れず、よりて此頃は老人の男看守をも用ゐて取締らしむさの事なり。女囚の六月十三日現在は百四十五名、外に未決のもの二三十名ありけり。女囚は元來道樂者の成れの果が多ければ、此多數者の中、十數は如何にして針を持つべきものなるかも知らざるなりさの事にて、此監には勞働をまするにも詮方なくマッチの軸並べをなさしむ。他のものは、囚徒の衣服の縫方、靴縫、輸出ハンケチの縁縫等をなしつゝあり。女に飾なければ、見るに堪へず、其凡ての飾りを奪はれて、柿色の筒袖を纒ひて黯々たる有様、目馴れぬ身には、寒氣立つの感ありき。女囚の状は、實に醜中の醜か、宜なり、女子の堕落せしものは、惡魔なりさいふとや。獄中には三才までの乳呑兒を携帶するを許す法なるが、此日の携帶小兒は十一名なりき。罪なくて囚屋の中に育立つ、この憐れなる小兒、ア、其行末や如何に。未決監内にて罪人なる母の小兒に通乳しつゝあるものをも見、また少年女囚が監内にて多くの小兒を守りつゝあるを見たるは、實に憎惜の極みなりき。

◎神戸の醜業婦

神戸の醜業婦は、藝娼妓を除くの外に四種あり。其最も上等なるは洋娶（ラシヤメン）なり。神戸兵庫にては、これをムスメ、またネヱさんさもいふ。其西洋人に買はるゝものは、異人ムスメさいひ、支那人に買はるゝものは、南京ムスメの稱あり。彼等は一ヶ月六七圓より二十圓までの給料を得て、轉々流寓して、淫を鬻ぐ。而て其頭飾衣服等を美麗にするよりムスメは、下等社會女子の理想さなり、また其流行を支配す。而して藝妓は中流以上の流行を支配せり。之に次ぐものは、下宿屋まはりの賣淫婦にして、彼等は父母等の家に在りて、處々の下宿屋を廻りて、職工及び會社員等の翫弄物となりて、金儲けをなす。彼等は往々ムスメとなるよりも儲け多きを以てムスメをやめて、此種のものとなるものも尠からざるよし。

第三は湊川神社の裏手に在る銘酒屋、小料理屋、揚弓店等にて淫を賣るものなり、此等を稱して十錢さいふ、蓋し其價をいふなるべし。海岸邊にも此種のもの多し。第四は最も下等なるものにして、即ち湊川の堤防に夜々出でゝ、通行の下等勞働者等を客とす。客をいざないて怪しき家に入るもあれども、甚だしきは、眞の野合の輕便なるをなすものあり。此頃はまた堤防近邊に、男地獄徘徊するよし、其客とする女子は、多くは、紡績會社の工女輩なりさいふ。

神戸は新開港場なるを以て風俗甚だしく亂れ、特に女子の風俗、淫亂を極むるを以て、下等なる外國人等、淫慾を逞ぐるに最も便利なるを喜ぶの風あり、而して彼等は、其家の子女を見ても、概して、淫を賣るの徒さなして、道傍に之を嘲罵するも尠からずさいふ。兵庫は其古へより都會をなせるの地たるを以て、舊家等も多く、從つて、民俗は神戸に比すれば、頗る敦厚なりさいひ、例へば商店の如きも、神戸にては客を遇する頗る横柄なれども、兵庫にては丁寧にて諸物品も神戸よりは多少安直なりさいふ。僅に湊川を隔てゝ、風俗を異にすると如此し。神戸にて警察署長安藤則静氏を訪ひて、民俗如何を聞くに、氏は其頽廢の甚だしきをいひ、尚は建設中なる神戸には、人々皆暴利に趨りて、汚行を耻ぢず、紳士にして妾を置かざるものなく、家庭さして見るべきものなきを痛嘆せり。凡そ我邦風俗の亂れたる處、開港場を以て最さす、而して其中にも最も甚だしきは此神戸なるべしさいふ。

◎神戸の商館員會社員の汚行

神戸にて、金廻りのよき男子を、會社員、外國商館員さなす。外國商館に奉公するものなば、市中にて、屋敷に出るさいひて同地若者の理想さなれり。彼等は多くの金を得て、また之を酒色の費に擲つ。同地の遊廓、料理屋は、月掛にて、客を遊ばすが故に、遊び易く、從つて放蕩遊惰に陷るもの、比々さして多し。大阪また然り。京都も同様なり。友人某告げて曰く、神戸大阪等は家を持たざる青年の住むべき地に非ずと。

●大阪

●大阪

◎其の女學校

大阪には、市立高等女學校及師範學校女子部の外に、基督教主義には、梅花女學校(組合派)浪華女學校(日本基督教會派)プール女學校(英國々教會派)ウヰルミナ女學校(カンバーランド長老教會派)關西女子高等學校(米國監督教會派)の五あり。佛教派には相愛女學校(眞宗派)綜藝種智院(眞言宗派)の二あり。天主教にも一女學校あり。

◎市立大阪高等女學校　大阪市北區常安町

同校は我國高等女學校中の古參の一にして、京都府高等女學校と並び立つの觀あり。校長は君溪派の芝直太郎氏にして、他の教員は男子十三名、女子二十名なり、生徒現在數は七百七十餘名にして、平均出席者七百二三十名といふ。之を一覽したるに、學科の如きは、組織整頓せるやう見受けたり。同校一ヶ年の經費は一万二三千圓なりといふ。同校には寄宿舍を設けず。今日の處、學舍頗る狹隘を告げて如何とも致し難く、近年多數の入學志願者あれども、撰拔試驗によりて採用し、他の多數の望を滿すと能はずといふ。

校長芝氏と語る。氏曰く目下大阪市には、此一高等女學校のみにては、頗る不充分にて、是非とも、南部の方に一校を增設するの必要あれども、新設經費十万圓以上を要するを以て、其運に至らず。然れば、隣地なる師範學校の移轉を待ちて、校舍を擴張するとにまでも致したしと。氏また曰く、當校の規則として、生徒は登校の際には衣服は綿服に限り、下駄は表の付かざるもの、頭髮は銀杏髷と上卷とに限ることとなし、白粉紅は之を禁ず。之に反するものは、登校を許さず、校外にては、如何に華美の風をなすも致方なけれども、校內にてはこの規定を嚴守し、いやならば退校すべしとの考なり。華美なる風をして困るものは、會社員相場師などの暴利を貪るものゝ子女に多く、且つ一般の家庭に教育なければ、たとひ白粉等を禁ずるに、他の日は其禁に從へども、月曜日の朝登校するものを見れば、往々頸筋に白粉の殘れるものあり、それは、母親などの、娘に今の中に白粉を附け馴して置かでは、年を取りてつきが惡くなると心配して、學校に行かぬ日に、勉めて之をなさしむもの多きに由ると。

問ふて曰く、高等女學校に子女を送る父母の考は、單に嫁入の資格を付くるに非らずやと。校長答へて曰く、今日にては、多分は夫れなり。近來往々嫁の貰いのは無きか、生徒中より一人見立てゝ吳れなどゝいふもの尠からざれども、一々之を拒み、たゞ何某の性質學業は如何になど聞かるゝ時には、之に答ふるとゝなせりと。京都府高等女學校長もまた同樣の談ありき。

此高等女學校にては、大阪府各警部長の注意によりて、生徒一般に、徽章として、洋銀製にて、梅花の中に大阪市の徽章なる鱗の尾(みをつくし)を彫り付けある簪を挿すとゝなれり。

◎梅花女學校　大阪市西區土佐堀裏町

此校は組合教會派なれども、傳道會社より獨立し、大阪教育社なるものありて、之を監督し、其社員十三名はいづれも同地の基督教界有力の士なり。同校は今日に至るまで卒業生を出すと、殆ど百名、以て成立日既に久しきを知るべし。校長は、三宅荒毅氏なり。學科は本科、普通科あり、また附屬小學校を有す。教師數、米國婦人二名、本邦婦人六名、男子五名なり。生徒六月現在九十餘名といふ。寄宿生三十名。

◎浪華女學校　大阪市東區清堀

此校は十餘年以前、一致女學校と稱して、櫻井ちか子等の創設せしものにして、日本基督教會派の傳道會社に屬す。主幹は阿部虎之之助氏にして、教師は米國婦人二名、本邦婦人四名、同男子七名あり。生徒現在六十名計寄宿生二十名程。地位は大阪諸女學校中第一等の好地に在り、且つ其軍營に近きを以て、軍人の子女にして入學するもの尠からずといふ。生徒中十名計の紫色の袴を穿てるを見受けたるが、こは他の官私立女學校には無き處なり。同校にはまた附屬小學校ありて、可成の生徒あり。

◎關西女子高等女學校　大阪市東區道修町八百屋町角

同校は明治二十年婦人學習會と稱して起り、同地上流社會の夫人令孃の爲めに、多少の學問を講習したるものゝ、明治二十六年に至りて、今の名に改まりたるものなり。監督教會派に屬す、創立者にして校長たるは桑田次氏といふ。學科は豫科、本科、高等科、専修科あり。生徒現在約六十名内寄宿舍生六七名あり。教員は外國婦人一名本邦婦人二名、同男子六名なり。校内寄宿舍の設けあり、校長夫妻自ら之を監督す。

○プール女學校　川口居留地第十二番

同校は英國々教宣教師の傳道會社に屬し。明治十二年の創立に成る。學科は、豫科、本科あり。また附屬小學校あり。教員は校長ヤストワム女史の外、外國婦人二名、本邦婦人五名、同男子三名あり。生徒は約七十名、内小學生徒約三十名あり。寄宿生徒四十名を有す。生徒には、同教會の傳道者の娘など多しといふ。

○ウヰルミナ女學校　川口居留地二十番

同校は十余年前に創立せられ、カンバーランド長老教會傳道會社に屬す。現時、生徒は本科三年生以下のみにて、二十名許。其内小學生徒十八名あり。學科は豫科、本科、高等科、英語科に分ち、英語専修科には、數名の新たな女生徒が學ぶといふ。大阪にては、内地雜居準備といふにて、男女ともに英語に志すもの尠からざる由なりと、同校一教師語れり。校長はノーーランドレド孃、他に本邦男女教師數名あり。

○相愛女學校　大阪東區本町四丁目

○[illegible]神智院　大阪西區江戸堀北通二丁目

○大米敎派女學校　大阪川口居留地

○大阪府師範學校女子部　大阪北區常安町

以上の四校は、予の親しく見ざりしが、不幸にして經驗するを能はざりしが、相愛女學校は大谷籌子を校長とし、[illegible]福智院は佐伯覺仰師を校長とせる由に聞き、後者は漸次盛大に赴き、就ては之を擴張せんとする目論見中の由。

○大阪の工女

大阪工女の數に就て云へば、本誌四百九十四、六號に述べたる處あるが如し。大阪は工業の淵、從つて工女其數多く、其尤も多きは、紡績工女にして、之に次ぐは、燐寸工女なるべし。予は大阪府警部長鈴木定直氏其他友人の紹介により、多くの工場を視察する筈なりしも、急に歸省すべき事となりたるを以て、僅に一の日本紡績會社を視察したるのみ。されど之に於て實見したる一斑は、以て全豹を推するに足らん。該社の工女は總計六月現在千百三十二人、内寄宿の者八百七十六人なり。年齡は十五才以上三十才までの定めなれども、猶ほ規定外の年少及年長者を使用す。工女出身の地方は福井縣第一に位し、大阪之に次ぎ、廣島また之に次ぐ。賃金は一日平均二三十錢の間に在りて、其賄料は一日七錢なり。勞働時間は一日十二時間、晝夜交代なり、休日は日曜日は交代休業にて、全休日は、祭日、正月三ヶ日及三大節のみ。元來紡績工女の爽快には、時間外勤勞を命ずるなれども、さりながら、工場に留まるを以て、社内にて最も重き所は、寄宿舍にして、更に之に次ぐぞ。予は工場を見たり、而して又工女の寄宿舍を見たり。寄宿舍内にて、夜業の工女等が、疲れ果てて亦深々にして打臥れる状態、眼を蔽はざるを得ざりしといふより外は更に實するを要せじ。社内には、工女の爲め教育を與ふるの組織なれども、之に志すものは甚だ尠しとか。實にさもあるべし、長時の勞働に身を勞らしたる結果、一字を學ばんよりも、睡を貪らん方、自然の數なるべきものを。

○大阪の少女及下女

當地は何故に斯くも、男女の風俗共に、東京と大差なきに至り、風俗は割合に保守なる大阪人も、また十中八九まで東京化せり、たゞ異なれるは、下女の間に、多少古風を存するのみ。大阪の下女の風采は、以前は頗る規則立ちたりしものな

りしが、此頃甚だ衰へたれども、なほ紅粉裝飾の商家には、依然古風を存するなり。其古風といふは、十七八歳までは髮は奴に結び、丈長又はやつこ元結をかけ、金竹の簪(花かんざしを禁ず)を挿し、帶は吉彌若しくは交綴に結び、やゝ長じては髮は兩曲、帶は交綴もしくはお太鼓なり。大阪にて下女の事をお竹さんとも呼ぶ、蓋し下女にお竹さんといふ名のもの比較的に多ければなるべし。お竹につぐは、お松、うめ、つるなどの名なりといふ。

少女の風として、大阪の特り他に異なるは、十四五才までの少女は、悉く髮を平常にても矢吉彌といふに結ぶ事なり。他地方にても盛裝の時はこれに結べども、平生は大概貝の口なり。この矢吉彌に結ぶとは、數年間よりの復興なりといふ。

◎風俗の頹廢

府廳に前野部長鈴木氏を訪ふ。談民俗に及んで、氏頗る大阪人士の不德なるを痛嘆す。凡そ大阪にては、紳士と呼ばるゝものは、妾を蓄ふるを以て、一の必要なる資格となし、現に業なるもの、代議士に撰ばれて、直に妾を買ふ。人其故を問へば、今日以後の体面を保たんが爲には、是非共かくせざるべからずと。某會社の社長は、會社の正面に妾宅を構へたるなど驚くべくして、而て大阪人士の毫も怪まざる處なり。大阪にて、紳士仲間の宴を張り、又は名士貴人を饗應する際などには、必ず、北新地の貸座敷富田屋其他を以てすといふ。警部長、風俗の頹廢に慨あり、之を救ふは必ずや教育に由らずんばあらず、而して今の教育の効力頗る薄きを見て、大に思ふ處あり、曾て、中學程度以上の官公立學校長を集めて、自今、警察權を以て、校外に於ける學生を取締らんとを相談して、いよ〳〵實行するとなりしに、小學校もまた進んで其取締を受けんとを求め、今日にては、結果やゝ見るべきものありと。凡そ學校生徒と見受けらるゝものの、不埒の擧業あるときは、巡査之を誰何して、之を學校に通知し、また學生間にて、ヘチ〳〵等の賭博を行ふもの多きを以て、手當り次第、之を圖り押へて、而して之を利益に由りて罰するは、彼等青年の一生を紙物にする事なるを以て、一々學校に引渡すとなれりといふ。

◎大阪の醜業婦

大阪にて貸座敷と稱するものは、東京等と異なり、いはゞ待合の如きものにして、内に娼妓を置かず、彼等は別に子方と稱する家に養はれて、貸座敷の招を受けて、出張して色を賣る。子方にては一切客を取らず。而して自前にて娼妓を置き客を上ぐるものを、てらし店といひ、松島遊廓に在るものは、皆これ。他の新地にも點在して、品位下等の方なり。娼妓をマンタといひ、子方より出で、客の處に行くには、往來を歩むとなれば、警察にては、成丈目に立たぬ風をなさしむれば、以前の如き華麗の風なし。

* * * * * *

●松山

◎其の女學校

松山に留宿すれば、則ち忌中の事ゆゑ、諸方を視察すること能はず、僅に同地在住の二女學校を訪問したるのみ。

◎松山女學校　松山市二番町

同校は十餘年以前、二宮次郎氏外有志基督教徒の手に成立したるものにして、卒業生を出すこと二十名、現在生徒六月末本科生七十七名、手藝專修科生五十七名合計百三十四名内寄宿生二十名なり。校長は二宮氏にして、教師には外國婦人一名、本邦婦人九名、同男子四名あり。學科は豫科、本科、撰科、手藝專修科、別科、音樂專修科あり。

◎愛媛高等女學校　松山市一番町

同校も始ど十年前愛媛縣高等女學校と稱して、地方有志の設立したるものにして、其後實業女學校と改稱せしが、本年四月一日より、縣會の議決によりて、毎年千五百圓宛の補助を受けて、今の名に改まり、高等女學校三學年程度の組織とされり。校長は渡邊明綱氏、教員には男子三名、女子三名あり。生徒は在籍者百二十名なれども、毎日出席者平均八十名計内裁縫專修科生三十名なり。

●岡山

○其の女學校

岡山市に於て女學校の形を備へたるものは、僅に一のあるのみ。

○山陽女學校　岡山三幡村

同校はもと十餘年以前、有志基督教徒の創立したるものなるが、本年四月に及んで、全然其組織を改めて、文部省令高等女學校規定に從ひ、同地二十二銀行頭取新莊厚信氏を校長となし、加ふるに、地方にて名の聞えたる十六名の人を委員とし、また岡山の奇人中川横太郎翁其世話人となりて、校資募集其他万事に盡力怠らず。教師は女子五名男子一名、他に囑托教員として、醫學校教授、新聞記者其他十二名の人あり。現在生徒七月現在六十八名内技藝專修科二十九名あり。

岡山には裁縫教授の私塾頗る多く、其數殆ど十。女子教育の觀念は一般に低く、上流社會には、裁縫、點茶、琴、挿花等を知れば、充分なりとなし、されば市中の女子にて高等教育を受けたる者は至りて尠し。同市には玫瑰女學校なるものある由なれども、其名聞えず。

○岡山の工女

岡山縣警部長六角耕雲氏の紹介を得て、二紡績會社に到る。岡山共立絹糸紡績會社は、堅く縱覽を謝絶するを以て、やむなく、たゞ社長に就きて、其工女の現狀を聞くに、工女數六百四十人計内六分通は寄宿にして、此會社の工女は、いづれも縞木綿の洋服を制服として着けたり。これ絹糸紡績の勞働上とまた糸を竊むとを防ぐの策に出しものといふ。其工女は群馬、富山、山口縣大島郡、及近縣地方のもの多し、就中大島郡のもの、最も成績宜しとぞ。岡山地方に出稼に來る女には、香川縣のもの多けれども、同地の女は、風儀惡く、貯蓄の念に乏しきを以て、同會社にては、成丈採用せずといふ。

岡山紡績會社は明治十三年の創立にして、現今工女數は約千六百名、内寄宿者約七百名、年齡は二十歳未滿の者最も多けれども、また四十歳以上なるも尠からず。同會社は創立の際工女を香川縣に募集したるの由來を以て、今日にても同地のもの最も多し。されど前にもいへるが如く、彼等の風儀は甚だ惡敷、不正の所業をなすもの尠からず。同會社にても亦工女の寄宿舍を見たるに、赤裸々にして寢たるもの、其醜狀驚くに堪へたり。教育の組織あれども、教場は錠卸にしたる儘にて開かず。

岡山縣地方は一體に婦女の職業の多き處にして、凡そ鐵道停車驛の在る處には、大概紡績會社あり、されば紡績工女の需用甚だ多く、これに次ぐ職業は、麥稈眞田、花莚等を盛んなりとし、其他活版の文撰に用ゐらるゝ女子も多し。

○岡山縣下の醜業婦

岡山市には中島町とて旭川の流に沿ひて遊廓あり。貸座敷數五十九、娼妓數百八十七人（三十年末調査）なり。之を瞥見したるに、娼妓等、戸前に床几など置き、浴衣を着て、打涼みつゝ、客を呼べり。なほ縣下にて貸座敷の存在せる地方は、警察署所管別によれば、西大寺（貸座敷七娼妓二十四）牛窓（貸座敷六娼妓三十六）味野（貸座敷十九娼妓百四）玉島（貸座敷二娼妓五）笠岡（貸座敷九娼妓二十九）倉敷（貸座敷三娼妓十一）津山（貸座敷十五娼妓五十六）にて通計すれば岡山縣下の貸座敷百二十戸、娼妓四百四十九人（明治三十年末調査）なりとす。娼妓は香川、愛媛より出づるもの多しといふ。藝妓は遊廓に在るものと、市中の檢番に在るものとあり。他に自前にて營業するものを町藝者といひて下等の方なり。密賣淫は到る處に多く、警察部にては、これが打拂に力を用ひつゝあり。

岡山地方にては工女、下女、其他の醜業婦共に香川縣の者最も多きとは屢々いへるが如くにして、いづれも評判宜しからず。下女の如きは、香川のものといひ、また小豆島女などいへば、之を雇ふことを忌むの狀あり。

●京都

予の京都に入りし時には、諸女學校は既に暑中休業中となりたるを以て、之を視察することを得ざりき。

◎京都府高等女學校　京都市上京區土手町通丸太町

同校長たる河原一郎氏を訪ひて、同校の現狀を聞けり。同校は明治五年時の京都府知事槇村正直氏の新英女學校と稱して設立したるものにして、日本女學校中の最古者たり。現今にては、其經歷と其組織とを以て自然全國高等女學校の模範たるの位地にあるのみならず、文部省に於ても、また之を重視せり。現在生徒七百余名、今年の新入學生は近來に無き多數者にして、到底全志望者を採用すること能はざりき。河原氏の說によれば、日清戰爭以後は、女子教育振作の一時機をなしたりしが、今年はまた一階段をなしたるやうに覺ゆと。生徒七百餘名寄宿生二百二三十名あり。同校は目下校舍の狹隘を告ぐるを以て、師範學校跡に、八百名を容るゝに足るべき大校舍を建築することゝなれり。教員は校長を除くの外に男子十五名女子二十一名あり。河原氏の意見は、教師としては成るべく女子を採用するを以て、女子の教育上最も良法をなすに在りといへり。

◎同志社女學校　京都市上京區常盤井町

同志社女學校に教頭松浦政泰氏を訪ふ。同校は生徒現在約六十名内寄宿舍約四十名あり。教師には同校專任の男女教師の他に同志社男學校の教授中にて、講義を引受くるもの多ければ、其良教師に富める點よりいへば、全國女學校中の第一なるべし。松浦教頭また純然女學に盡瘁し、卒業生の成績も頗る宜しといへり。

◎平安女學院　京都市上京區烏丸通下立賣

◎京都私立女學校　京都市上京區御幸町通二條

此兩校に就きては其主任者を訪ふの機なかりしを以て其現況を聞くことを得ざりしは遺憾なりき。前者は監督教會派に屬し、壯麗なる校舍を有し、田村初太郎氏を其教頭とし、松山高吉氏もまた教授たり。後者は蜷津貫一郎氏の設立する處にして、主として裁縫其他の手藝を教ふる處なるやに聞けり。

◎京都の女俗

京都は古來、女子のおやつへを愛させし處、男子を生むよりも女子を生むことを以て誇びとなし、氏なくして玉の輿に乘り、家門爲に光彩を生ずるを理想とせし處なれば、女子の出でゝ人の妾たるを恥ぢざる事今日もまた依然たり。甚だしきは中流以上の女子にして、嫁入仕度の代に、人の妾となりて、而して父母の家に在るもの尠からず。父母は極めて之を秘密にして、其間に相當の嫁入口を守望するなり。また關西地の外人また觀光の外客京都に來りて贔に歡娛を擅にするに於て便なるを以て、其妾用に應ずる醜業婦甚だ多し。

遊廓に在りて藝娼妓を業とするものゝ外に、父母等の家に在りて、自前に娼妓鑑札を受けて、從業紙に出でゝ客を取るものあり。京都にては、藝娼妓の成り上りものは、出をつた者と稱して、交際に上手にして、氣の利き靜なるを賞美する風あり。

京都の女子の古俗今日は全くすたれて、殆ど東京と擇ぶ處なし。されど藝妓及び舞子は、依然たる京都風をなして、こればかり異觀なり。

＊　＊　＊　＊　＊

予の視察の跡につきて、各地の女俗を概觀するに、頭髮衣服等、何處共に東京風となり了りて、たゞ其地に從つて、女の氣前、身のこなし方の異なるものあれば、形は化しても、化しきらぬ處ありて、自然に地方的特色は殘れりといふべし。風俗則る處に廢れたると共に、女俗即ち破れ、何處に於ても之に對する痛嘆の聲を聞かざるはなし。

鳴瀧のよるの嵐にくだかれて
ちる玉ごとにやどる月かげ

時文

◎日の出島　富士の卷　村井弦齋作　春陽堂版

日の出島の卷々いよ〳〵出でゝいよ〳〵多く、この富士の卷にては、お金夫人の貧乏暮しの奥女中となりてのおかしみを骨髄とせり。即もなき書き方なれば、消夏の讀書には、相應らずよろしとやいはん。

◎新刊 岡山孤兒院　石井十次述　岡山孤兒院版

岡山孤兒院は、我國中にての最も大なる慈善組織の一にして其成立維持法等に至りては、凡そ仁義の志あるものゝ必ずや知らずんばあるべからざるものなり。此書は即ち院長石井氏が自ら同院に關する事項を簡約かつ明瞭に記述したるものなれば、有志者宜しく一本を得て之を讀むべし。價價に五錢。

◎女界文壇細目　（本月廿八日〆切まで）

◎今後の女子（小島政吉）　女子之友第二十五號
◎臺灣の女子風俗一斑（鈴木光愛）　同
◎我が女子の友（二）　同　第二十六號
◎時弊矯正に對する婦人の覺悟（鹿山）　女鑑第百六十號
◎家庭の衞生と婦人の注意（鹿山）　同　第百六十一號
◎國家の進歩と女子教育（秦敏之）　花の園生第八年第十一號
◎米國婦人の事業（アーード夫人）　大日本婦人教育會雜誌第百五號
◎化粧の注意　大阪毎日新聞七月廿八日
◎女子の禮作法（大阪婦人の醜躰）　同　七月三十一日
◎人心の醜美（民藏）　萬朝報七月二十一日
◎趙婦阿錦（野史氏）　世界の日本第三十號
◎女囚獄改良　東北日報七月廿六日
◎男女風俗問題（萬朝報と警發問稿）西村茂樹氏の警發論◎女權論　早稲田文學七年第十一號

片々

◎女生裸躰檢査論　學校衞生主事三島通良萬朝報記者に對つて曰く、學生々徒の身躰を檢査するは、明治三十年文部省訓令第三號に基く者にて、主意は學生々徒の發育及び健康の狀態を知悉するにあり。殊に躰重を測定するには着衣の儘すべからずと規定せられたれば、教師が女生徒を裸躰として躰格を檢査したりとて、決して越權にあらず。又胸圍脊柱等を正確に檢査せんには、勢ひ粗裼にせしめざるべからず、醫師が患者を診斷するに乳房を捻り陰部に觸るゝ等は有勝の事なり。若し此を以て猥褻醜惡の行爲とせば、醫師が患者を診斷することも、湯屋の三助が婦人の脊を洗ふことも爲し得ざるに至らん。今や體育の必要朝野に唱道せられ文部省も成るべく之を奬勵せんとする折柄なれば、學生生徒の躰格檢査も一層精密を要し、從て女生徒裸躰檢査に關する非難も間々起るとあらん。貴下等に於いても充分此の意を諒し、餘りに好奇の筆を用ひて、躰育奬勵の前途に支障を與ふることなからんことを望む云々。（萬朝報七月十八日）

◎紀州ネル　紀州の綿ネル昨年末の統計は製造戸數八百四十三、機數一萬一千四百三十、職工一萬九百八十九人、反數九十三萬九千七百四十八反、代金三百二萬八千三百八圓なりといふ。

◎歐洲女皇の躰量　英國のヴヰクトリア女皇は身長は稍五尺を下れど、非常に肥滿せらるゝが故にその躰量は十二ストーン（二十貫百六十目）に上れり。されど歐洲の女皇中にて躰量の最重きは西班牙の攝政女皇イサベラ陛下にして、躰量實に十四ストーン（二十三貫五百二十目）を有せり。又最も輕きは墺國の女皇にして、陛下は朝起と運動とを以て有名なるにも拘はらず、その躰量六ストーン半（十貫九百目）に過ぎず。獨逸の皇后は十三ストーン（二十一貫八百目）に上り、露西亞の皇后は輕き方にして八ストーン强（十三貫五百目許）なりと。

◎歐洲の帝王は皆親戚　獨逸の系圖學者の調べたる處に依るに、歐洲各國の帝王は土耳其を除くの外は、何れも甚だ遠からざる親戚の間柄にして、今を去る事、百五十年前に生存せし二人の姉妹より分れたるものに過ぎずと云ふ。（以上二件大阪毎日新聞）

◎肉食は乳婦に害あり　乳婦にして、多量の肉食をなすれば、乳の分泌を妨げ、果ては、恐るべき癆症となる。近來、中等以上の社會には、此種の病症に罹るもの續々として出で、殆んど乳婦の流行病の如くなるが、之を豫防するには、適宜に菜食するに在りといふ。

◎女學雜誌を吊ふ　女學雜誌の曩に奇禍に罹りしや女鑑なる一婦人雜誌あり。平

生情纏綿、溫雅篤行を以て聞ゆるものなり。嗚、我を吊して曰ひけらく、惜しきかな、女學雜誌（岩本善次氏擔當）女には、似つかはしからぬ筆鋒を弄びて、時に或は、氣焰萬丈、正眼には、のぞむべからざること弁論會議の議長も、さこそ思はるゝことあり。今その第四百六十六號の記事には、餘りに巾をきかせ過ぐして、出版法第二條の範圍外に亘れることありとて、去し十五日出版を差止らる。由來お轉婆娘は、さかくに轉び勝なり。年は老いて心がまへは、わかき老婦、今は、なしき一命を法の刄におとす。嗚呼惜哉。其の靈や、高く天には、とゞまらずして、とくまた、この世に生れいでよ。と多謝々々。我なるものまた恙なく茲に復せり、希くは安ぜよ。

◎秋朝報　七月七日より始めて東京府下にて藝妓せる者の氏名を録し、毎日十人位づゝ列記せり。多分今年一杯はかゝる見込みなりとか。

◎蘇北の私塾　三百八十二、生徒八千五百三十七人。

◎大阪　の某かるた店にてカルタを賣出したるは昨三十年中五十六万九千餘組といふ。

◎大日本婦徳會　と稱して六七月頃數名の女達が、諸處にて演説したる、其後日譚を聞くに、其會長なる某男子は、不正の所業ありて拘引せられたりと。女流また離散す。これ實は彼男子が一時の金儲になせしとか。さもあるべしとは初より推せし處なり。

◎米國婦人と佛國　米西戰爭に於て佛國人が西班牙に肩持つやうなれば、米國の婦人爲に心よからず。五月中紐育に會したる二千餘の女子は、自今一切佛國の流行品を用ゐざるの議案に同意し、之に出席したる裁縫工女の代表者は之に同意して、彼國製流行服地などは今後二ヶ年間輸入せざるべしといひたりとか。若しこの事にして行はれんか佛國の機業家は一年三百万弗の損害を蒙るべし。又右婦人達は更に進んで、千九百年の佛國博覧會に支出する經費の件につき、國會をして、之に協贊せしめざらんが爲、議員中に運動しつゝありとか。敵愾の情如斯きを以て駐米佛國公使之を憂へて、米國外務大臣と商議する處さへありたりとか。この反動を聞きて巴里新聞などには、切に米國婦人が、巴里流行品なくて、さて如何して身邊を飾らんとするならん、彼等はこの決議を悔ゆるの日來るべしなどゝ嘲るもありといふ。

◎豐年の兆　今年は豐年なるべしとの希望は、地方何處共にありて、此頃あちらこちらにて古來豐年の兆と傳へたるもの、今またありといふを聞く。收穫までは、なほ多分の日子を餘し、厄日をも控へたるとはいへ、何とも云ひ難けれどもかく人々が豐年の希望に心いさみ立つに至りたるは實に目出度き事なり。蒼天希くは民の疾苦を憐みて、今年は五穀豐に、蒼生安きを得せしめよ、彼等をして更に大なる失望に陥らしむるを勿らしめ玉へ。

時報

◎華族女學校卒業式　は七月十八日を以て行はれたり。本年の卒業生は、本科十一名、別科一名なり。式場伊東切子は卒業生總代として、細川校長の告辭に答へ又相良照子外一名の洋琴連彈もあり。當日は來賓は總理大臣、宮内大臣、文部大臣外百數十名なりしといふ。

◎酒田高等女學校の開校　新設の酒田高等女學校は去る五月二十八日を以て開校したるが、開校當時の生徒は既に二百七十餘名に達したりといふ。同校々長は長尾田郎氏なりといふ。

◎孝女受賞　鹿兒島縣出水郡阿久根村波留五百三十八番戸鈴田千代助の孫女イヱ今年十六歲孝を以て聞ゆ。遂に左の賞を得たり。

出水郡阿久根村波留五百三十五番戸
平民　春田いゑ

資性至孝幼にして親を喪ひ常に祖父母に仕へ繊弱可憐の身を以て一家の重任を肩にし孜々勉々六年の久しき未一日も渝ることあらず一家内人倚つて以て纔に口に糊するを得洵に奇特の行一郷の儀範たるべきものなり仍て本村會の議決を經て茲に金十圓を賞與す

明治三十一年六月二十一日

出水郡阿久根村長　末田實

◎高等看護法講習生募集　東京帝國大學醫科大學醫院にては、此度高等看護法講習生を募集するよしに聞きたるが、いよ／＼志願者は八月廿五日限り願出すべしとの事にて、其應募並に試驗規則等左の如し。

本院に於て高等看護法講習生を募集す志願者にして東京府下に住居の者は願書に學業履歷書を添へ來る八月二十五日までに本院に願出べく其他の地方に住居のものは該地方廳に就き出願方照會すべし、但規則書を閲覽せんとするものは本院事務室に申出交付を受くべし

明治三十一年七月

東京本郷區元富士町
東京帝國大學醫科大學附屬醫院

人員二十人　年齡二十三年以上三十年以下

試驗科目

一讀書　漢字交り文講讀　　二作文　往復文、記事文
三地理　日本地理の大要　　四歷史　日本歷史の大要
五理科　動物、植物、物理、化學の大要　　六算術　加減乘除、分數、小數、比例
七體格

調習生たるを得べきものは普通作文地理歴史理科等の各學科に付高等女學校第四學年の課程を卒りたるもの又は同等以上の學力あるを要する事調習生は在學中病院内に寄宿せしめ食料衣服其他若干の日給を給する事[illegible]二ヶ年にして[illegible]二ヶ年間は金十五圓乃至二十五圓[illegible]月給を以て同院の看護婦長に勤務するの義務あること

なほ志願者は既婚者にして、家事の係累なき女子に限るとの事なり。

○外國人養子入夫法　七月十一日を以て左の法律發布せらる。

法律第二十一號

明治六年第百三號布告は之を廢止す

第一條　日本人が外國人を養子又は入夫と爲すには内務大臣の許可を得ることを要す

第二條　内務大臣は外國人が左の條件を具備するに非ざれば前條の許可を與ふることを得ず

一　引續き一年以上日本に住所又は居所を有すること

二　品行端正なること

○月給法の實施　七月十六日以後は民法の實施と共に、[illegible]

[illegible]

○孝子受賞　左の如し

[illegible]　阪本若[illegible]

阪本留太郎

[illegible]

明治三十一年七月十九日

[illegible]　高崎親章

○孝女受賞　[illegible]

左の如し。

[illegible]

[illegible]

特旨を以て其賞として金一圓下賜す

明治三十一年六月廿五日

佐賀縣知事正五位勳四等　武内維積

○同情すべき感心な女房として[illegible]九州日報の傳へたるは、[illegible]

[illegible]



東京裁縫女學校長 渡邊辰五郎先生著

裁縫教授書

全部三冊
定價金一圓
郵税金八錢

渡邊先生の裁縫に於けるや技術に長じ、理論に精しく、殊に其教授法の巧妙なるに至りては、餘人の企て及ぶ能はざる處なり。此書は即ち其特長の教授法によりて、諸般の裁縫技術を親切叮嚀に説明せられたるものなれば主婦は素より女學生も亦裁縫を學ぶに當りて、必ずや坐右此書を備ふるの要あるなり。

大取次 東京巣鴨村 庚申塚 女學雜誌社

●切拔通信の要旨

●切拔通信をなすべき種目は農工業商政治法律外交軍事政黨俱樂部教育宗教歷史時状運輸交通土木建築鑛業山林美術技藝各人身上に關する事等凡そ諸新聞紙上掲載の件は小説廣告に至るまで其委托に應し精閲遺漏なく勉めて配達を迅速にして以て愛顧者の便益を期す

東京市京橋區采女町廿一番地東京通信社内 新聞切拔通信部

●切拔手數料大要

●一己身上に止まる通信は一ヶ月金貳拾錢とす●一事業又は一時物に止まる通信は壹ヶ月金參拾錢より金五拾錢まで●一會社又は一團體は全般に涉する通信は壹ヶ月金五拾錢より金壹圓まで●前記の事項と雖とも關係の範圍廣く日々記事の多數なるものは臨機の契約を爲すことあるべし●月數に拘らず件數にて委托せらるゝものは東京は十件に付金貳拾錢地方は郵税を併せ金貳拾五錢とす尤も細事項は總て員外として件數に算入せず●本社切拔通信規則書御入用の方は御通知次第郵送すべし

布川靜淵 小此木信一郎二氏合著

俳諧史傳

和製美本 紙數三百二頁 中本全一冊
定價廿七錢 郵送 四錢宛 許郵券代用

俳諧の道近頃大に興り、去年此書を公刊せし吾社の微志をして幸に酬いあらしむ、幸慶何ぞ及はん。それ、俳諧は我文學史上に一大特殊の光明を煥發す、一句十七言、尺幅の裡、無限の烟波渺々として際なし、俳諧は和歌に孕まれ、連歌に興り、松永貞德となりて端緒を啓にし、西山宗因となりて、奇巧好奕なる談林の花を咲かしめ、更に詩聖松尾芭蕉の大手腕をかつて、閑寂沈痛なる正風俳諧の面目を構成す。數百年の間相傳へ、相襲ぎて庶民の美妙なる想念を深據せしめ、幽妙なる詩天地に逍遙す。其源流に溯り、其發達を叙し、其推移を討ね、其變遷を記し、其特想を論じ、繙讀一番、炳焉として斯文學を腦底に活現せしむるを期したるは、我が俳諧史傳なり。之を分てば、俳人個々の傳記となり。之を聯ねれば、整々一卷の史篇となす。逸事あり、名句あり。一篇の下、恍々乎として、月明かに花香しき境に遊ぶが如くならしむ。若し夫れ一筆輕々に下さず、一字苟もせず、而も文章平易簡明、叙記精確剴切なるや否やは、世自ら公論あらむ。世の文士、一本を座右に備へざる可からず。

早稻田文學評に曰く、此書近年の好著、比較的に言へば、空前の好俳諧史傳なるべし、史眼の頗る濶大なる、叙事評論の其主題と相叶ふて優美、又閑雅、奇警、又遒勁なる、讀むものをして卷を措く能はざらしむるの致あり。

出版發賣元 女學雜誌社

[illegible]月十日[illegible]四百[illegible]十[illegible]女學研究の為三十項の問題を掲げて、各地女風俗の調査報告を大方諸君に向て求めたりしが、其後[illegible]の報告に接せしも、婦人問題や事頗る宏大、此等は未だ万分一をだに盡くすものに非ず、由て更に再び爰に調査項目を列挙して、投寄の報告、これより益々多からん事の希望す。

女學雑誌記者識

各地女風俗調査項目

[illegible]

（[illegible]は何代まで[illegible]、女、女子児、[illegible]者の仲間、婦人の[illegible]、ことに交通、教育、興業等によりて影響されたる近年女風の變化等）

十三 特に目立ちたる女の[illegible]、[illegible]、手腕[illegible]

十四 宗教上に於ける婦女子の信仰、事業、勢力

（女子の[illegible]に依りて生ずる[illegible]の名称、[illegible]、[illegible]、[illegible]り、及び[illegible]等に於ける女子の風俗を含む）

十五 妾、娼妓、藝妓となる婦人

（[illegible]婦人となる事、[illegible]のもの多きや、[illegible]、又は[illegible]者より[illegible]ものの多き等）

十六 女子の[illegible]に關する特別の[illegible]

十七 女丈夫、女傑、又は有力者にして、[illegible]の婦女子を[illegible]するもの並に其性名小傳

十八 婦女子に關する有名の古跡、古碑、並に其小史

十九 婦女子出奔（[illegible]、何地方に多く行くやの事）及[illegible]の状況

二十 [illegible]（[illegible]に對する[illegible]の有無を含む）

寄答者への注意

一 [illegible]に記載なきものは別に本名及住所を認められたし

一 寄答の[illegible]は[illegible]女學雑誌に掲載したる時は、寄答者に[illegible]の雑誌[illegible]を[illegible]す

一 [illegible]は凡て[illegible]の[illegible]たるべし

東京麹町區下六番町六番地

櫻井鷗村

拜啓小生義先般各地女子教育並に女風俗視察を思ひ立ち即ち其第一着歩として中國及九州に向ふの目的に以て去る六月九日東京を出發致し夫れより京都大阪神戸岡山松山の五地を客視察候處最早豫定の日限をも超過し且つ炎暑の節と相成り加ふるに諸女學校も休暇を告げ候を以て一先他地方巡回の事相見合せ七月廿七日歸京仕候次第に有之候小生の參向せざりし地方にて有志諸君の空しく御待受け被下候ひしも尠からざるべしと存じまよに恐縮の至りに御坐候へ共前述の次第に候へば何卒不惡御了察なし被下度候扨て又以上五地滯在中一方ならざる御厚配を蒙り申候諸君には歸京次第一々端書を以て御禮に及び申候へ共今又紙上を以て改めて其節の御厚情を謝し奉り併て失禮致せし段々御宥免の義奉希候右は以上申上度斯如に候敬白

明治三十一年八月

東京市麹町區下六番町六番地
櫻井彦一郎

「嚴本嘉志子」に對する批評

故若松女史が紀念にと、女史が英文の遺稿を集めて、其内外の知己及び良人巖本氏の發行せしものなり。その文字の簡明にして好く選ばれたる、高雅にして[illegible]もなうまざる、流麗清新の文まことに Queen's English の純なるものに恥ぢず。神田氏、頭本氏など今の英文士として知られたる人々の筆に成るものより、遙に自然にして生々したる心地す。否本國の女流と雖も、此文を成すもの盖し多しとするに足るべきか。孤女學院を訪ふの記の哀切のあたり、少しく日本人が詩的形容の流弊に失したる憾みあれど、皇后陛下、皇太子殿下の御事を記し奉るの文字などめでたく覺ゆ。こし方行末と題せる終りの一文、又一つの書簡に内館雜紀の事を記せるもの最も筆力を見る。女子教育と基督新教とは最も深く女史が心に印せし如くに思はる。この有為にして清新の思想を抱くの女史、早く故人となりて、この道を淋なす、これを惜しむもの、豈に其知己朋友のみならんや。

（文學界第四十七號、明治二十九年十一月三十日）

明治廿五年三月十五日遞信省認可

明治廿五年三月十五日遞信省認可